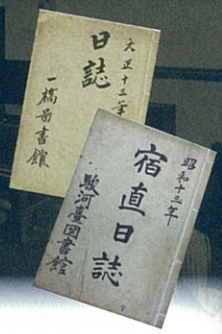
千代田図書館所蔵

一橋・駿河台図書館業務資料

紹介パンフレット



千代田図書館では、当館の前身である東京市立一橋（ひとつばし）図書館・駿河台（するがだい）図書館の時代の業務資料約130点を「一橋・駿河台図書館業務資料」と呼び、整理・保存しています。日直・宿直日誌、予算差引簿、閲覧料日計簿、図書購入関係綴など、大正12年から昭和30年頃までに作成されたこれらの資料からは、当時の図書館の様子を具体的に読み取ることができます。

戦前、公共図書館の創成期に、日比谷・深川・京橋とともに東京市立図書館の中心的な役割を担った一橋・駿河台の業務資料は、日本の図書館史研究および出版文化史研究において、大変重要なものです。

これらの業務資料からは、当時の図書館広報誌「市立図書館と其事業」や東京市の公文書だけではわからない、細かなレベルでの事業進捗状況や運営の実態を知ることができます。また、これまでは図書館員の回想録に記載があるがその根拠となる一次資料が見つかっていなかった情報について、裏付けとなる資料が見つかるなど、図書館史研究の精度向上の面からも注目されています。

千代田図書館では「千代田区立図書館出版関連資料コレクション構築方針」にもとづき、研究者の協力をいただきながらこれら業務資料の整理・調査を行い、皆様に広く活用していただけるよう、展示や講演会を通して紹介しています。

2016年10月

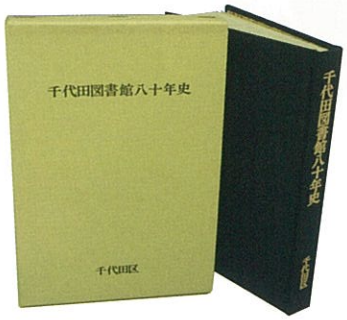
千代田区立千代田図書館

このパンフレットは千代田図書館で行った企画展示のパネルを元に作成しました

◆『千代田図書館八十年史』と一橋・駿河台図書館業務資料

『千代田図書館八十年史』(以下『八十年史』)は、明治20(1887)年に千代田図書館の前身である大日本教育会附属書籍館(しょじゃくかん)が創立されてから80年になるのを記念して、昭和43(1968)年に千代田区が発行しました。明治から昭和まで、それぞれの時代における社会事情との関係性を解説しながら、多数の業務資料にもとづいてサービスの内容・施設の様子・利用状況などが紹介されているため、千代田図書館のみならず、日本の図書館の歴史を知るうえでの基本書とも言われています。

その『八十年史』の後記には、千代田図書館(旧館)の倉庫から発見された業務資料を参考にして本書の執筆が行われたと記されています。

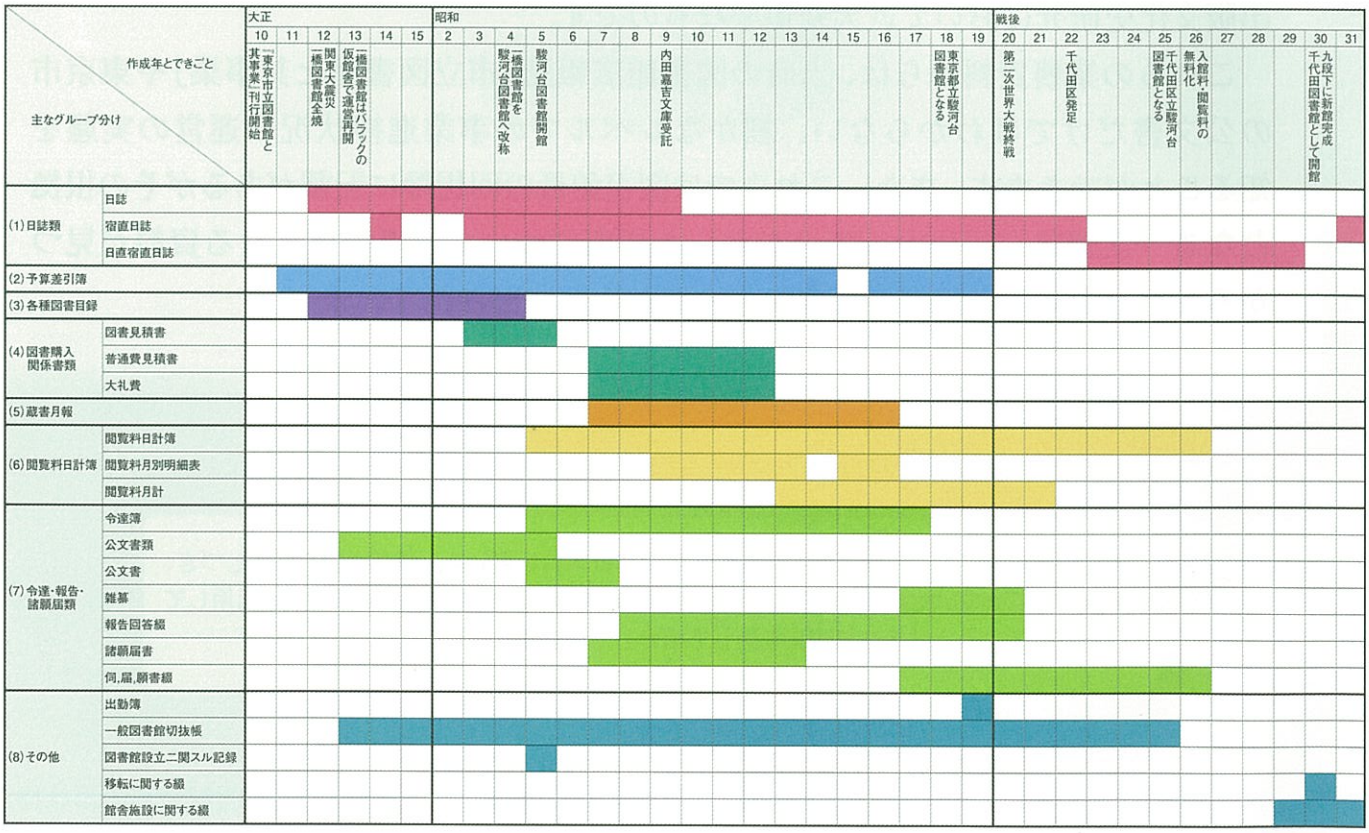


「昭和 42(1967)年 5 月に行われた特別整理(曝書(ばくしょ))のさい、それまで種々事情があって使えなかった倉庫の取片付けをしたところ、関東大震災前後からの、一橋ー駿河台図書館時代の沿革が明らかになるような一山の資料が発見された。……中略……この資料を利用し……中略……図書館史を完成させたならば、都内最古の公共図書館の記念事業としては、もっとも適当なものであろう」

『千代田図書館八十年史』後記より

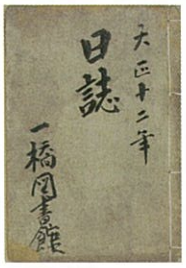
その後、それらの業務資料の行方はわからなくなっていましたが、平成25(2013)年、移転後の千代田図書館の閉架書庫の奥から、これらの業務資料が入った段ボール2箱が発見されたのです。このことは千代田図書館の関係者のみならず、図書館史の研究者をおおいに驚かせました。ただ、『八十年史』で紹介されている資料すべてが発見されたわけではなく、依然行方のわからない業務資料もあります。

◆一橋・駿河台図書館業務資料の年代分布

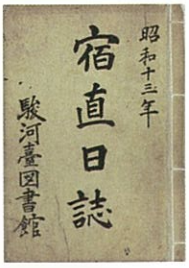


◆一橋・駿河台図書館業務資料の主なグループ分けと資料数

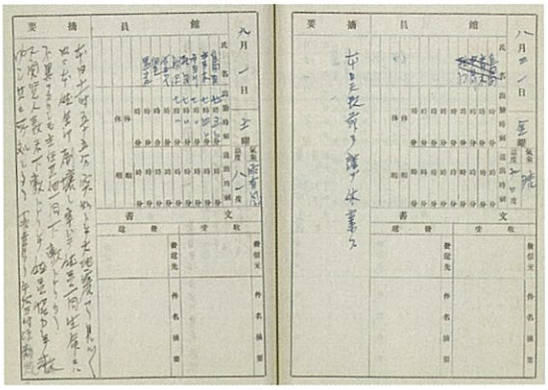
(1)日誌類　44点／大正12年～昭和31年

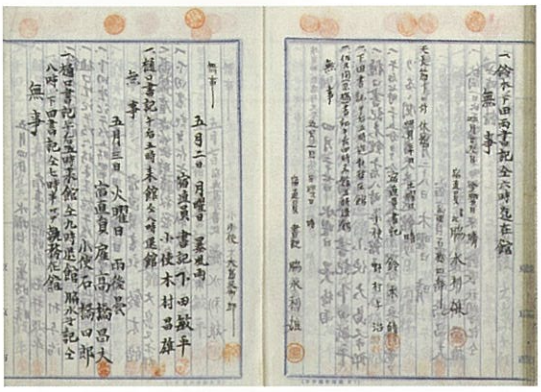


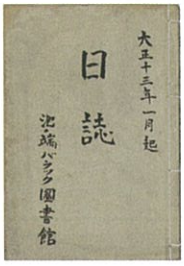
日誌　大正12年
(001)　＊目録番号

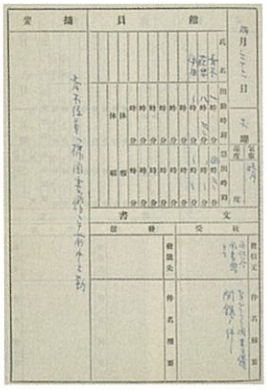


宿直日誌　昭和13年
(027)

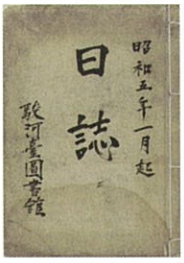






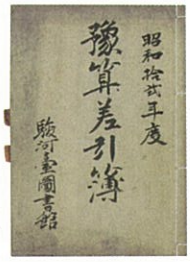


日誌　大正13年1月起
(002)

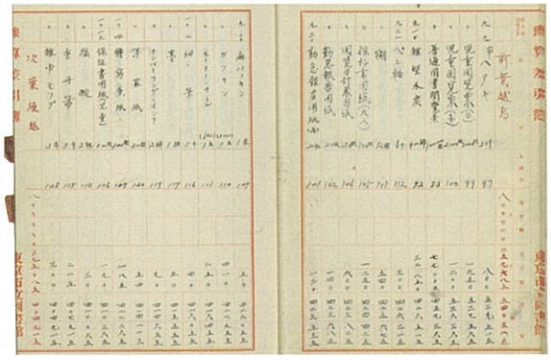


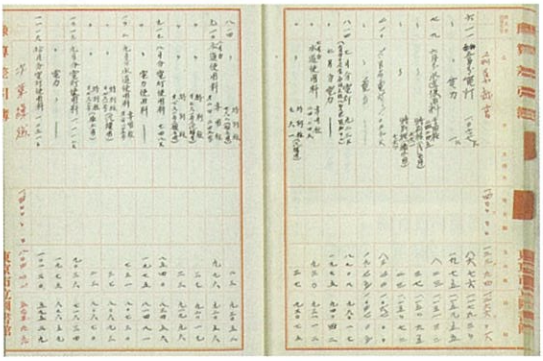
日誌　昭和5年1月起
(011)

(2)予算差引簿　22点／大正11年～昭和19年

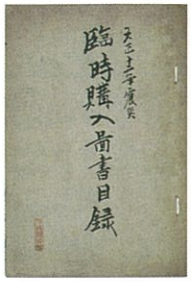


予算差引簿
昭和12年度(060)

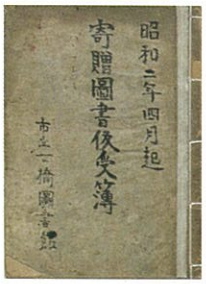




(3) 6点／大正12年～昭和4年
各種図書目録

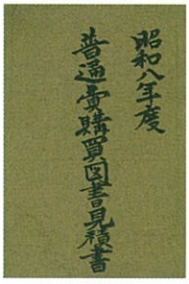


大正12年震災
臨時購入図書目録
(067)

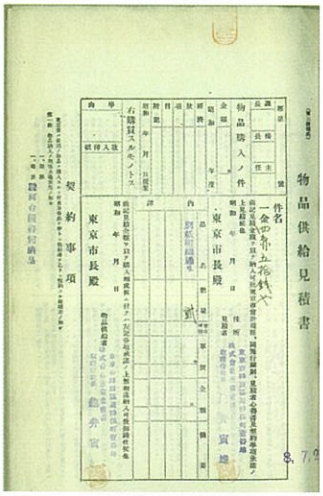


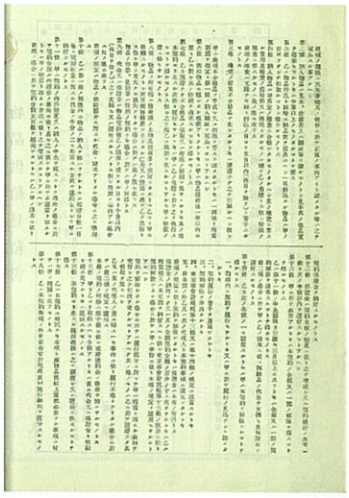
寄贈図書パンフレット
仮受簿
昭和2年4月起(069)

(4) 16点／昭和3年～11年
図書購入関係書類

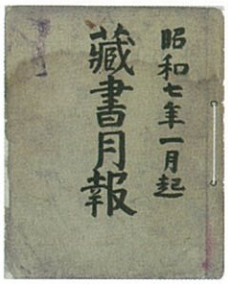


普通費購買図書見積書
昭和8年度　(080)

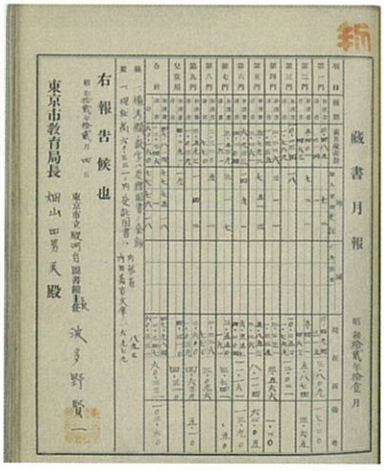


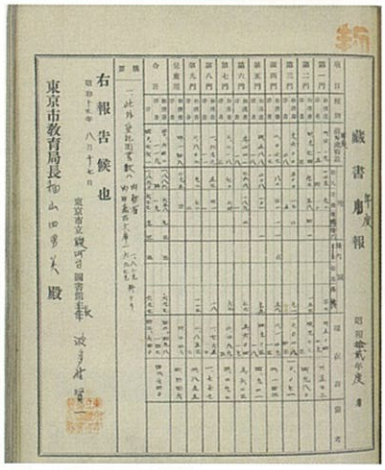


(5) 1点／昭和7年～17年
蔵書月報

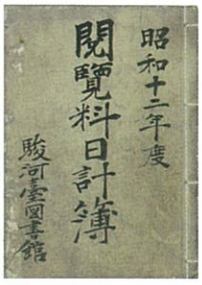


蔵書月報
昭和7年1月起　(089)

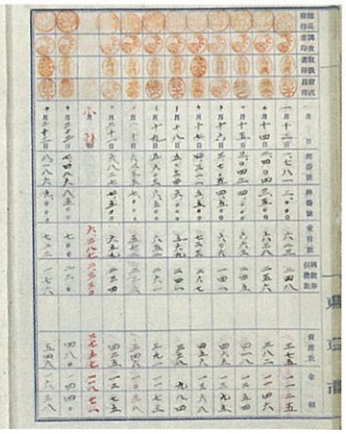




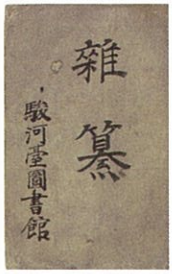
(6) 23点／昭和5年～21年
閲覧料日計簿

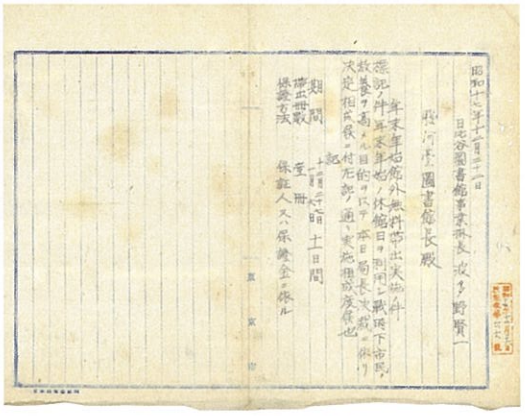


閲覧料日計簿
昭和12年度　(098)

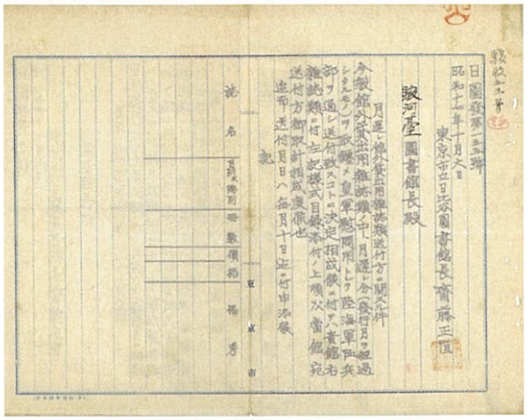


(7) 12点／大正13年～昭和25年 令達・報告・諸願届類

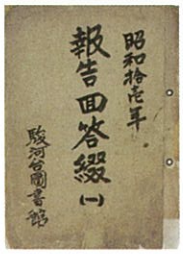




【左】「年末年始館外無料帯出実施ノ件」雑纂　(116-059)

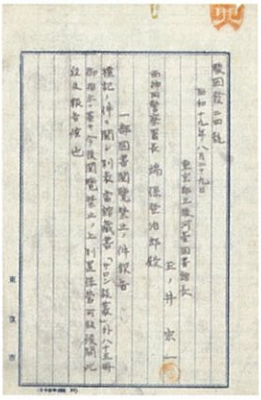


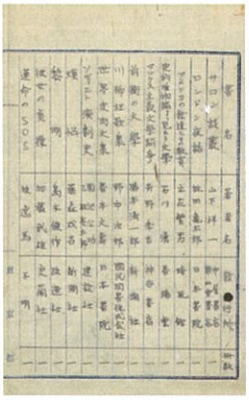
【右】「月遅レ館外貸出用雑誌類送付方ニ関スル件」雑纂
(116-074)

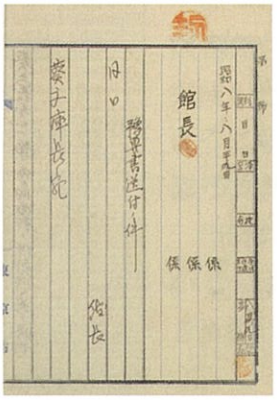


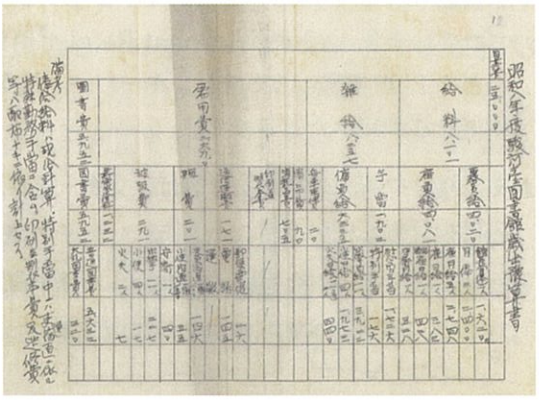
【左】「一部図書閲覧禁止ノ件報告」
報告回答綴　昭和11年起
(117-006)

【右】「予算書送付ノ件」
報告回答綴　昭和11年起
(117-075)







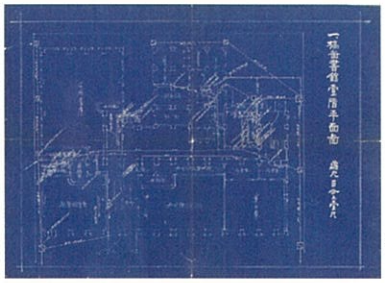


(8) 13点／大正13年～昭和25年 その他

一般図書館切抜帳
【左】(126-000)　【中】(126-023～027)　【右】(126-147～148)

東京市立駿河台図書館案内
(136)

【上】「[外観]」(129-002)
【下】「[児童閲覧室]」(129-012)
[写真 駿河台図書館写真　外観+内観]



「一ツ橋図書館
1階平面図」
[駿河台図書館
設計図(青焼き)]
(125-002)

「閲覧券交付所」
[閲覧券交付所ポスター](131-004)

「式辞」　[「東京市駿河台図書館復興建築工事竣工式典」式辞](128-001)

◆「一橋・駿河台図書館業務資料」に関するご案内

webサイトのご案内

●当業務資料に関する情報は、
千代田区立図書館ホームページにてご覧いただけます。

- ■目録および、資料のデジタル画像
- ■過去の展示とイベント・講演会
- ■コレクション紹介パンフレット
- ■そのほかの利用案内

デジタル画像閲覧のご案内

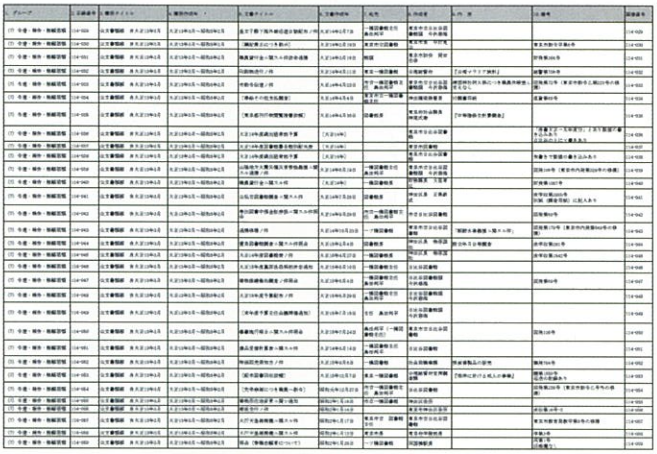
●全資料の画像をweb上で公開しており、どなたでもご利用いただけます。

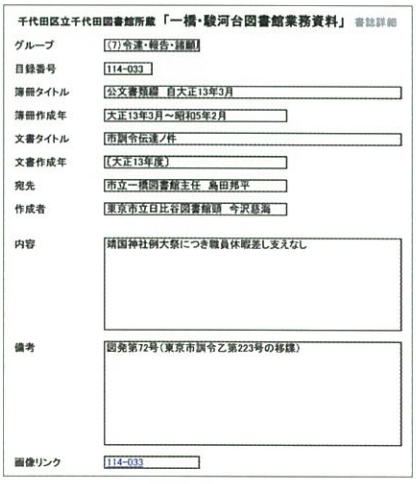
※資料保存の観点から、デジタル画像での閲覧を推奨しておりますが、現物の閲覧をご希望の場合は千代田図書館までお問い合わせください。

●全書誌(771点)の目録(一覧)はPDFデータが公開されています。Adobe Acrobat ReaderやiBooksなどのPDF閲覧ソフトでは、キーワード検索の機能をご利用いただけます。

●文書綴りや新聞の切り抜き等は、文書・記事単位で書誌を採録しています。

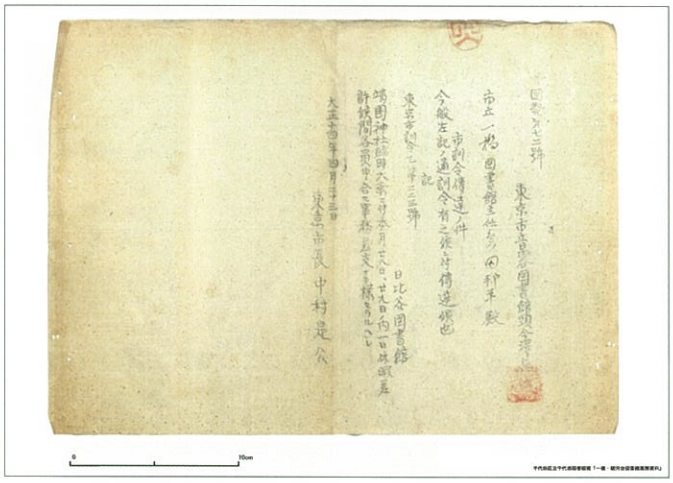
●目録(一覧)から、各書誌の個別ページ(PDF)および、画像(PDF)へリンクしています。





千代田区立千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」書誌詳細

グループ	(7)令達・報告・諸願
目録番号	114-033
簿冊タイトル	公文書類綴 自大正13年3月
簿冊作成年	大正13年3月～昭和05年2月
文書タイトル	市訓令伝達ノ件
文書作成年	(大正13年度)
宛先	市立一橋図書館主任 鳥田邦平
作成者	東京市立日比谷図書館頭 今沢慈海
内容	靖国神社例大祭につき職員休暇差し支えなし
備考	図発第72号(東京市訓令乙第223号の移譲)
画像リンク	114-033



デジタル画像の使用のご案内

●ホームページ上で公開しているPDF画像は、ご自由に保存・印刷していただけます。

●論文・ブログ等で画像を使用する場合は、簿冊タイトル及び所蔵館名を記載してください。
また、掲載物や掲載サイトアドレス等を千代田図書館までご送付・お知らせいただけますと幸いです。

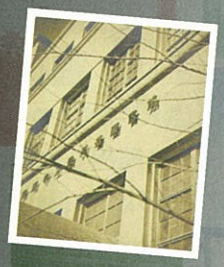
●下記データをご希望の場合は、千代田図書館までお問い合わせください。

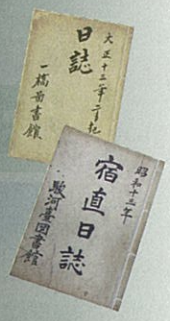
- 目録(一覧)のExcelデータ
- パネルや出版物に掲載するための高精細なJPEG画像データ

千代田区立千代田図書館「一橋・駿河台図書館業務資料」担当　〒102-8688　東京都千代田区九段南1-2-1　電話　03-5211-4290

◆展示アーカイブ

関東大震災前後の東京市立図書館





前期 一橋図書館と震災　2015年10月26日(月)～12月15日(火)

後期 駿河台に完成した復興図書館　12月16日(水)～2016年1月23日(土)

明治20年、千代田図書館の前身である大日本教育会附属書籍館(しょじゃくかん)が、現在の千代田区一ツ橋(ひとつばし)に開館しました。その後、現在の千代田図書館となるまでの約130年の間には、東京市、千代田区への運営母体の変化や幾度かの館名変更がありましたが、いつの時代も子どもから大人まで多くの人々に利用されてきました。

この展示では、千代田図書館に残る大正から昭和初期の業務日誌や写真などを通して、千代田図書館の歴史を紹介します。

前期では、震災前後の東京市立一橋図書館に焦点を当てます。公共図書館の創成期に東京市立図書館の中心的な役割を担った一橋図書館は、大正12年に関東大震災で焼失しました。被災時の様子や復興への道のりを紹介します。

後期では、昭和５年に開館した東京市立駿河台(するがだい)図書館に焦点を当てます。震災の教訓を踏まえて完成した時代の先端をゆく建物や図面から、当時どのように図書館が利用されていたのかを具体的に読み取ります。

当時の業務資料や記録からは、皆さんの利用している公共図書館とは異なる図書館の姿が見えてきます。公共図書館の歴史の一場面をご覧ください。

協力：奥泉和久氏、小黒浩司氏、小林昌樹氏、鈴木宏宗氏、西村彩枝子氏、吉田昭子氏（一橋・駿河台図書館業務資料研究会）

展示関連講演会

「一橋・駿河台図書館をつくった図書館員」
「東京市立図書館を利用するには」

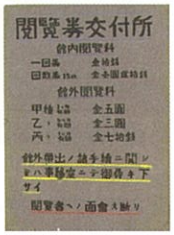
講師：奥泉和久氏、小林昌樹氏
（一橋・駿河台図書館業務資料研究会）

日時：2016年1月22日(金)
19:00～20:30(33人参加)

会場：千代田図書館 9階イベントスペース

※千代田区立図書館ホームページから、講演録をご覧いただけます

波多野賢一



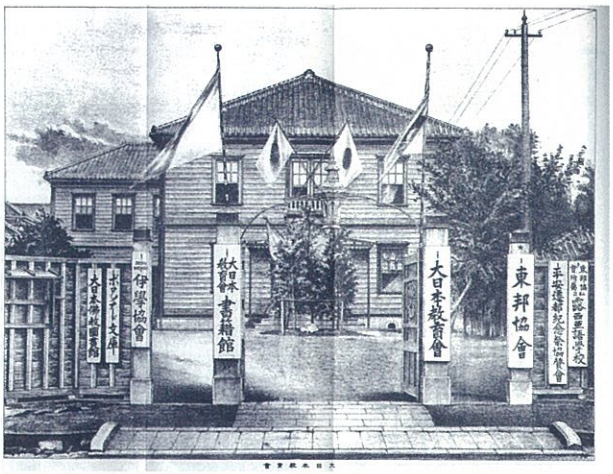
◆被災前の一橋図書館

はじまりは私立図書館

明治20(1887)年、千代田図書館の前身にあたる、大日本教育会(教員教育のための団体)附属書籍館が、神田区*一ツ橋通りに開館しました。当時の東京には、国立の東京図書館以外には現代の公共図書館(広く一般に開放された図書館)にあたるものはまだ存在していませんでした。

多くの人々がこの書籍館(図書館)を利用し、明治25(1892)年には年間の入館者が3万人を超え、閲覧室を増設するほど賑わいました(その8割は学生)。

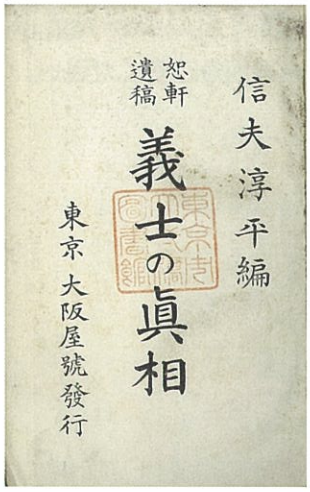
明治35(1902)年、麹町区*上六番町に私立の大橋図書館が開館し、明治41(1908)年、東京市立日比谷図書館が開館します。明治42(1909)年に深川図書館が設立されると、東京市はこれにつづけて各区の小学校に市立図書館を附設していきます。明治末期は東京の公共図書館の創成期でした。

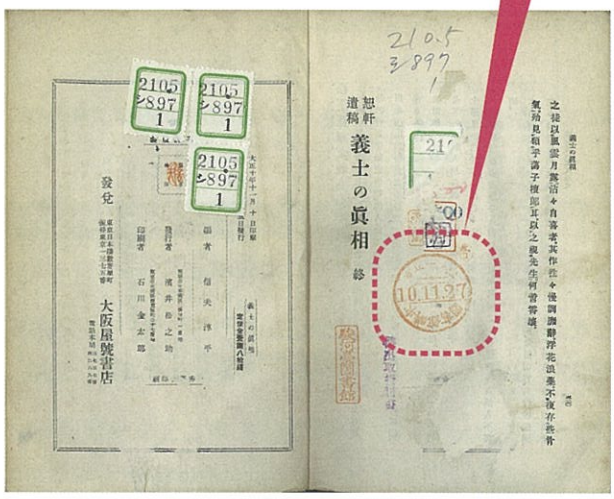


大日本教育会附属書籍館
『大日本教育雑誌』132号,宣文堂書店出版部発行,
1968.11-1969.8,明治大学図書館所蔵

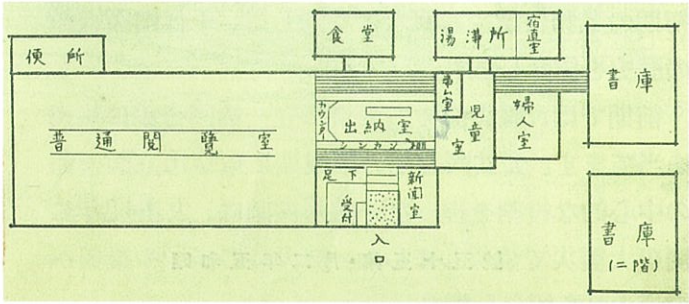
明治44(1911)年、帝国教育会(大日本教育会の後身)から図書館の建物・蔵書が東京市に委託され、東京市立神田簡易図書館となりました。大正2(1913)年には一橋図書館と改称され、日比谷に次ぐ独立館として整備されました。

*昭和22(1947)年、神田区と麹町区が合併して現在の千代田区となった

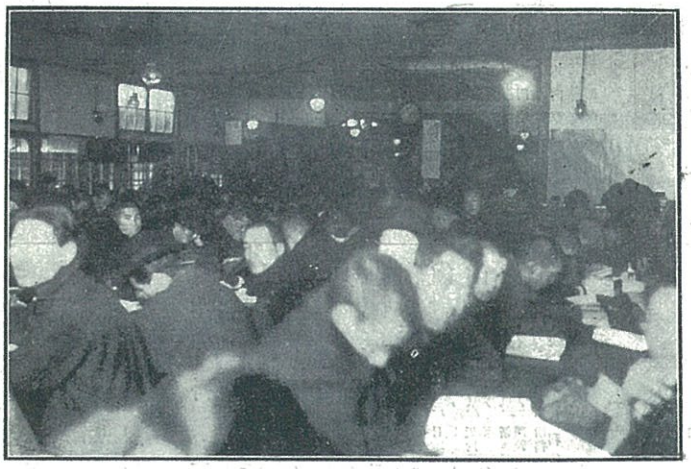




【上】一橋図書館の蔵書印
【下】一橋図書館の受入印(「駿河台図書館」の印は後から捺されたもの)
『恕軒遺稿 義士の真相』大阪屋号書店発行,1921.11,日比谷図書文化館所蔵



一橋図書館の平面図
『東京市立図書館と其事業』55号,東京市立日比谷図書館発行,
1930.2,千代田図書館所蔵



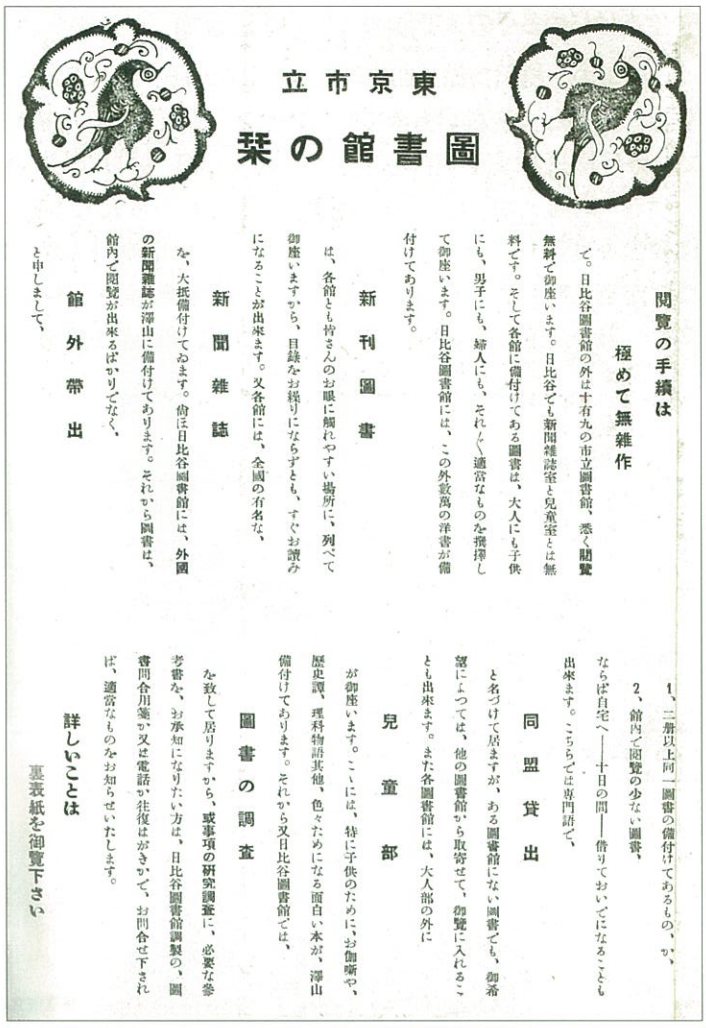
年末の一橋図書館の閲覧室
『市立図書館と其事業』4号,東京市立日比谷図書館発行,
1922.2,千代田図書館所蔵

東京市立図書館の一つとして、近代的なサービスを提供

大正4(1915)年、東京市立図書館は機構改革を実施しました。日比谷図書館を中心とする図書館組織が確立し、日比谷図書館以外の閲覧料の無料化(日比谷も児童室と新聞雑誌室は無料)、館外貸出、相互利用(市立図書館の他の館の所蔵資料を取り寄せて利用できる)など、サービスが大きく改善されました。

大正11(1922)年の「東京市立図書館の栞(しおり)」では、近代的なサービスが案内されています。下段に「同盟貸出」とあるのは、相互利用のことです。レファレンスサービス(調査・研究のための資料案内)もPRしています。市内の図書館はネットワークで結ばれ、どの地域にいても人びとが図書館を利用できるシステムがつくられました。

日比谷図書館から他の館へ書籍などを自転車で運搬する様子
『市立図書館と其事業』12号,東京市立日比谷図書館発行,1923.3,千代田図書館所蔵



東京市立
栞の館書圖

閲覧の手續は
極めて無雑作
で。日比谷圖書館の外は十有九の市立圖書館、悉く閲覧無料で御座います。日比谷でも新聞雑誌室と児童室とは無料です。そして各館に備付てある圖書は、大人にも子供にも、男子にも、婦人にも、それ〴〵適當なものを撰擇して御座います。日比谷圖書館には、この外數萬の洋書が備付てあります。

新刊圖書
は、各館とも皆さんのお眼に觸れやすい場所に、列べて御座いますから、目錄をお繰りにならずとも、すぐお讀みになることが出來ます。又各館には、全國の有名な、

新聞雑誌
を、大抵備付てあります。尚ほ日比谷圖書館には、外國の新聞雑誌が澤山に備付てあります。それから圖書は、館内で閲覧が出來るばかりでなく、

館外帶出
と申しまして、
1、二冊以上同一圖書の備付てあるもの、か、
2、館内で閲覧の少ない圖書、
ならば自宅へ——十日の間——借りておいでになることも出來ます。こちらでは專門語で、

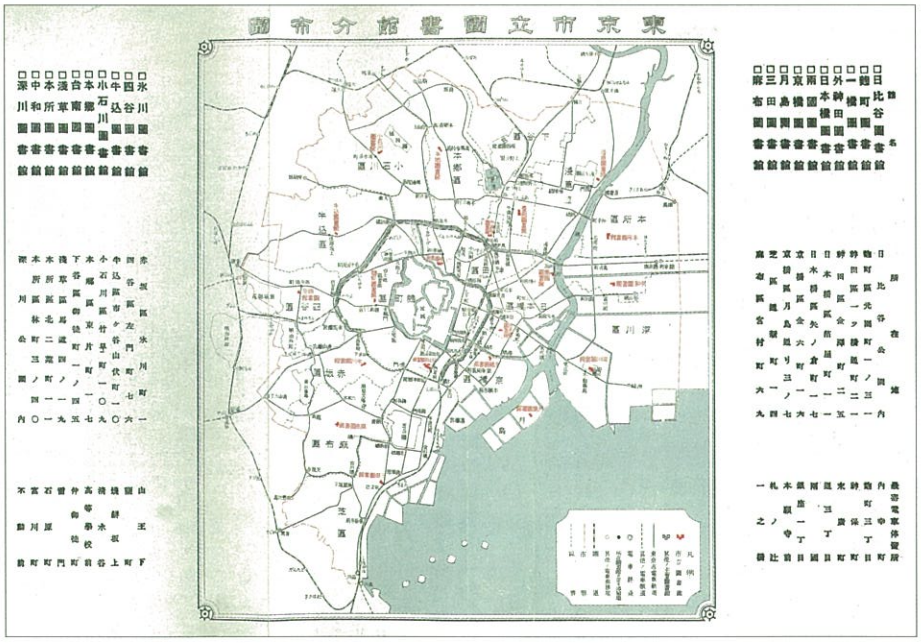
同盟貸出
と名づけて居ますが、ある圖書館にない圖書でも、御希望によつては、他の圖書館から取寄せて、御覧に入れることも出來ます。また各圖書館には、大人部の外に

兒童部
が御座います。ここには、特に子供のために、お伽噺や、歴史譚、理科物語其他、色々ためになる面白い本が、澤山備付てあります。それから又日比谷圖書館では、

圖書の調査
を致して居りますから、或事項の研究調査に、必要な參考書を、お承知になりたい方は、日比谷圖書館調製の、圖書問合用葉か又は電話か往復はがきかで、お問合せ下されば、適當なものをお知らせいたします。

詳しいことは
裏表紙を御覧下さい

「東京市立図書館の栞」
『市立図書館と其事業』6号,東京市立日比谷図書館発行,1922.3,千代田図書館所蔵



「東京市立図書館の栞」
『市立図書館と其事業』6号,東京市立日比谷図書館発行,1922.3,千代田図書館所蔵

また、市電の路線図と図書館を示す分布図からは、都市の近代化に合わせて図書館が定着していった様子が伝わってきます。独立した施設をもち、日比谷に次いで中心的な役割を担った深川、京橋、一橋の各館では、工業地域、商業地域、学生街といった、地域の事情に応じた蔵書を備え、多様な利用者へのサービスが実施されました。

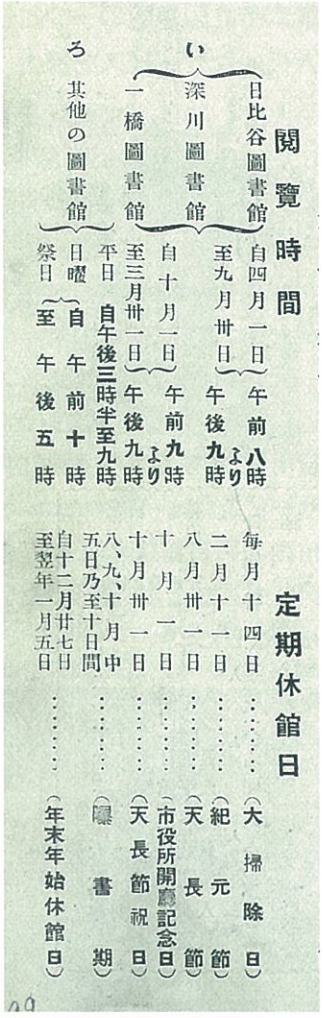
学生をはじめ多くの人で賑わった一橋図書館

この頃の一橋図書館の開館時間は、夏期（4～9月）は8時～21 時、冬期（10～3月）は9時～21時と大変長いものでした。また、市立図書館の開館日数は320～330日ほどで、毎月14日と曝書（現在の特別整理）、年末年始、祭日などが休館日でした。

学者・知識人から学生・一般庶民、子どもから大人まで、様々な人々が東京市立図書館を利用していました。一橋図書館は、東京商科大学（現在の一橋大学）や各種学校などが近く学生街に位置することから、受験勉強や、各種の資格を取得するために多くの学生が押し寄せ、日比谷図書館に次ぐ利用者を集めました。

	館内	館外（貸出）	合計	一日平均	開館日数
日比谷	406,097人	19,953人	426,050人	1,287人	331日
一橋	**294,421人**	**33,175人**	**327,596人**	**1,027人**	**319日**
京橋	111,459人	39,588人	151,047人	463人	326日
深川	158,100人	31,246人	89,346人	570人	332日

大正11年の東京市立図書館（独立館）利用者数
出典:『市立図書館と其事業』12号（東京市日比谷図書館発行,1923.3）


閲覧時間
日比谷圖書館　自四月一日　午前八時　至九月廿日　午後九時より
い　深川圖書館　自十月一日　午前九時より　至三月廿一日　午後九時
一橋圖書館　平日　自午後三時半至九時
ろ　其他の圖書館　日曜　自午前十時　祭日　至午後五時

定期休館日
毎月十四日……（大掃除日）
二月十一日……（紀元節）
八月廿一日……（天長節）
十月一日……（市役所開廳記念日）
十月廿一日……（天長節祝日）
八、九、十月中五日乃至十日間……（曝書期）
自十二月廿七日至翌年一月五日……（年末年始休館日）

『市立図書館と其事業』1号,
東京市立日比谷図書館発行,1921.10,千代田図書館所蔵

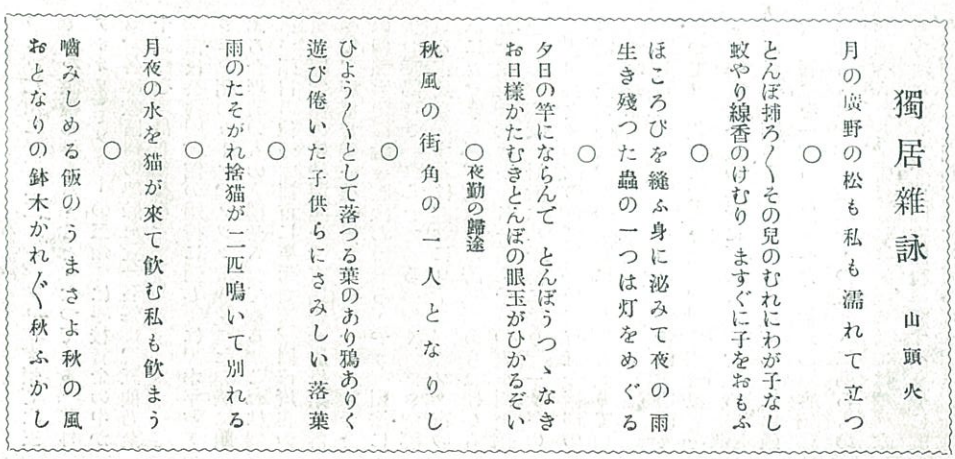
◆図書館員点描①　種田山頭火（たねだ・さんとうか、1882-1940）

種田正一は、山頭火として知られる大正・昭和期の俳人。山口県防府生まれ。

大正９(1920)年離婚、直後に東京市役所の臨時雇として一橋図書館に勤務。このとき38歳。翌年６月、東京市役所雇。上司だった竹内善作は、同年日比谷図書館へ移り、図書館広報誌『市立図書館と其事業』の編集にあたる。創刊号(1921.10)に14句、４号(1922.1)に16句、山頭火の句が掲載されているのは、竹内が採用したのであろう。

大正11(1922)年、病気のため一橋図書館を退職。翌年、関東大震災に遭い熊本へ帰り、大正14(1925)年に出家している。

若き日の山頭火
『山頭火全集　第2巻』
春陽堂書店発行,1987.3


獨居雜詠　山頭火

月の廣野の松も私も濡れて立つ
○
とんぼ拂ろ〳〵その兒のむれにわが子なし
蚊やり線香のけむり　ますぐに子をおもふ
○
ほころびを縫ふ身に泌みて夜の雨
生き殘つた蟲の一つは灯をめぐる
○
夕日の竿にならんで　とんぼうつゝなき
お日樣かたむきとんぼの眼玉がひかるぞい
○夜勤の歸途
秋風の街角の一人となりし
○
ひよう〳〵として落つる葉のあり鴉ありく
遊び倦いた子供らにさみしい落葉
○
雨のたそがれ捨猫が二匹鳴いて別れる
○
月夜の水を猫が來て飲む私も飲まう
○
嚙みしめる飯のうまさよ秋の風
おとなりの鉢木がれ〳〵秋ふかし

『市立図書館と其事業』1号,
東京市立日比谷図書館発行,
1921.10,千代田図書館所蔵

◆関東大震災と図書館の被害

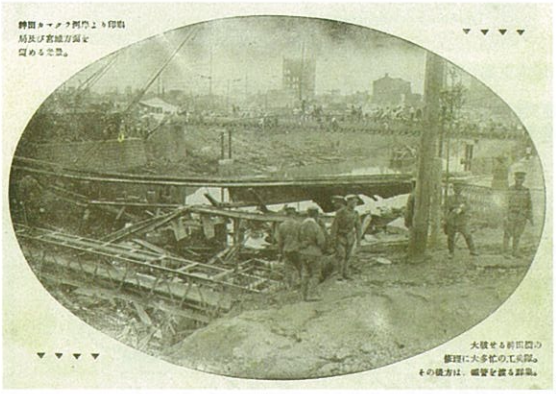
関東大震災が発生

大正12(1923)年9月1日午前11時58分、震度7、マグニチュード7.9の巨大な地震が関東地方南部を襲いました。地震による家屋の倒壊によって出火し大火災が発生、また、電気・水道・道路・鉄道等のライフラインにも甚大な被害が生じました。

この関東大震災による被災者は約340万人(そのうち死者が約9万人)、約38万世帯の家屋が全焼し、東京市では人口の75%が被災しました。

神田駿河台のニコライ堂付近の焼跡

地震一時間後の日比谷公園付近



大破した神田橋

門柱のみが焼残った大蔵省

神田橋北側より九段方面を望む

神田カマクラ河岸より皇居方面を望む

『関東大震災号 国際写真情報』第2巻 第10号,東京国際情報社発行,1923.10,千代田図書館所蔵

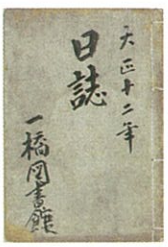
麹町区では全面積の22%が焼失。区役所・霞が関の官公庁舎・警察署・郵便局などの公的施設が失われ、人口の70%が被災し、56%の世帯で家屋が全半焼しました。大手町などでは、耐火構造のはずの土蔵造りや煉瓦造り建築にもかかわらず、地震により屋根瓦が破損したり、木骨がむき出しになったところへ飛び火した火災が多く、「耐震」を欠いた「耐火」構造の弱点が浮き彫りとなりました。

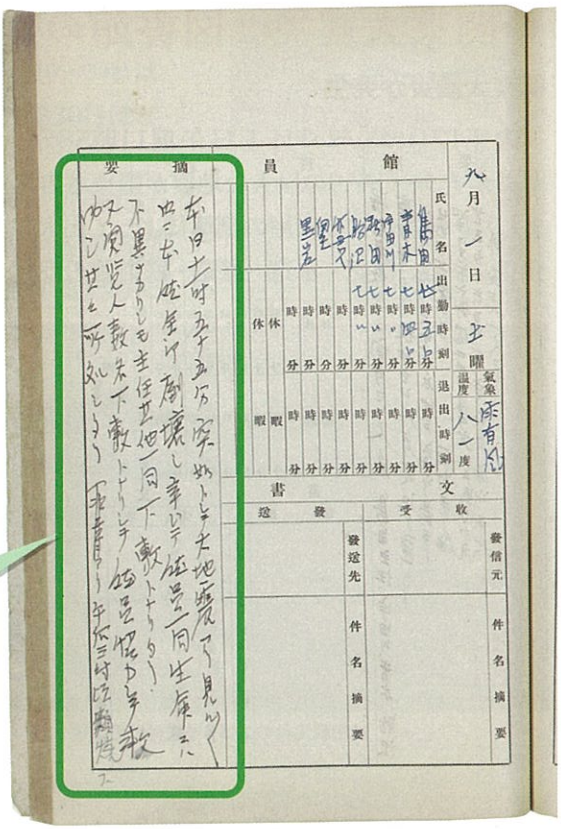
一橋図書館が立地する神田区は、住宅の密集した下町地域が多かったため、火災の被害が特に大きく、全面積の94%が焼失するという、壊滅的な状況でした。人口の91%が被災し、89%の世帯で家屋が全半焼しました。

全焼してしまった一橋図書館

一橋図書館は、8月14日から休館して特別整理が行われ、この時に同時に館内修繕も行われました。前日の8月31日は、天長節（大正天皇の誕生日）のために休館しましたが、9月1日は通常通り開館していました。

古い建物だったため以前から心配されていましたが、やはり地震発生後２分で建物全体が北方に倒壊しました。そのとき館内には百数十人の閲覧者がいましたが、外へ逃げる時間はほとんどなく、いったん閲覧机の下に潜みました。多くの人は、第二震がくる前にお互いに助け合って避難しましたが、二十数人は剥落した壁土や棟木の下敷となってしまい、図書館員が救助にあたりました。

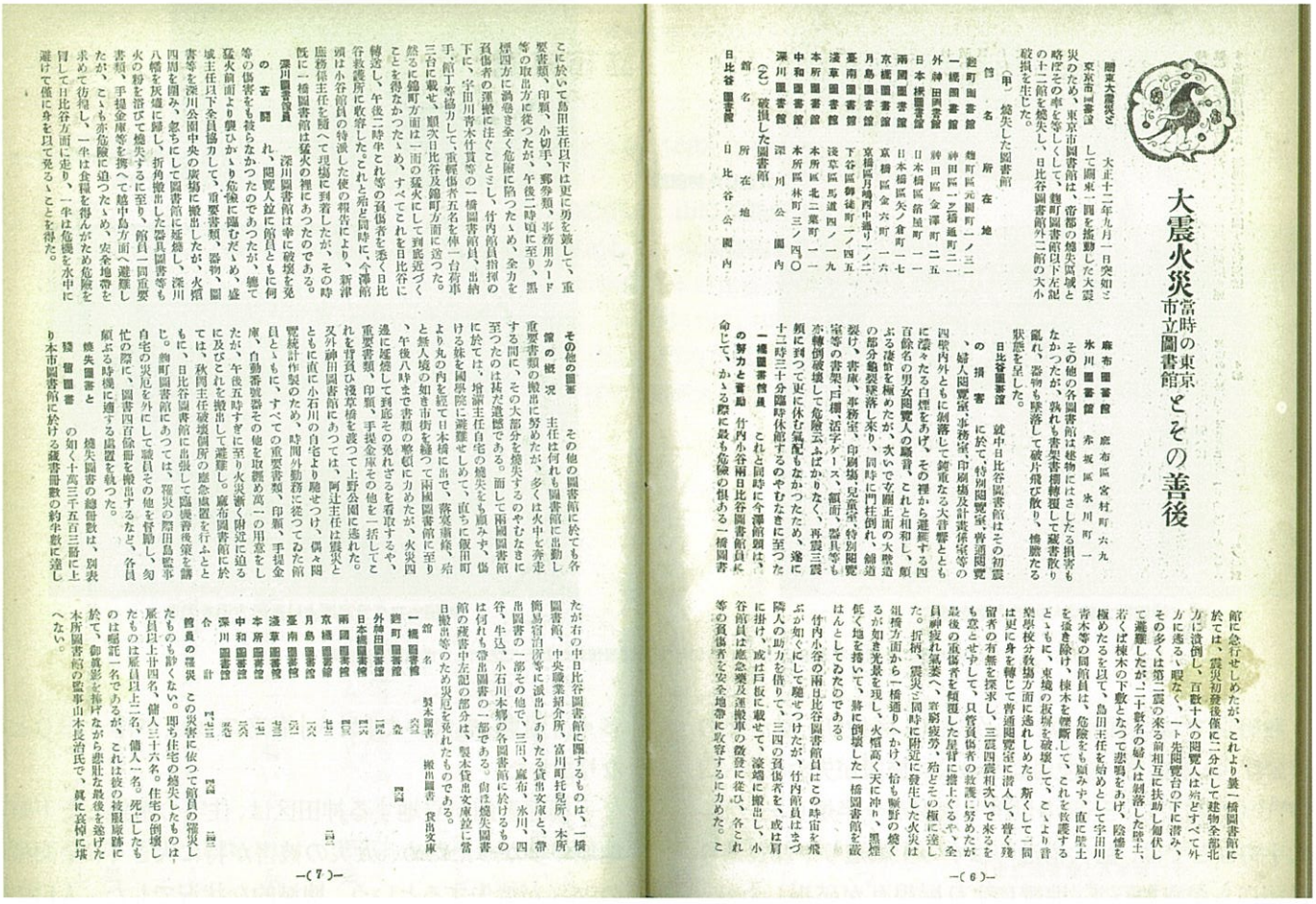




大正12年9月1日（土）
本日11時55分、突如として大地震あり。見る見る内に本館全部倒壊し、
辛じて館員一同生命には不異なかりしも、
主任其他一同下敷となりたり。又閲覧人数名下敷となりしを、
館員協力して救助し、其々処理したり。午後3時頃類焼す。
当日の出勤者は8名（島田,青木,宇田川,秋田,勝沼,竹貫,奥,黒岩）

『日誌 大正12年』(001),一橋図書館作成,
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

※業務資料記載情報は、カタカナ→ひらがな、
旧漢字→新漢字、漢数字→アラビア数字に置き換え、適宜句読点を補いました。



大震火災当時の東京市立圖書館とその善後

「大震火災当時の東京市立図書館とその善後」
『市立図書館と其事業』18号,東京市立日比谷図書館発行,1924.3,千代田図書館所蔵

日比谷図書館の今澤慈海（じかい）館頭*は、市立図書館の中で最も危険性の高い一橋に、日比谷図書館員２名を派遣しました。一橋図書館員と到着した日比谷図書館員が負傷者を救出し、重要書類等を運び出すなか、午後３時頃、猛火は一橋図書館をのみこんでいきました。

一橋図書館では、建物と約１万冊を超える蔵書を失いましたが、利用者・職員ともに死者はありませんでした。

*館頭（かんとう）＝東京市立図書館全体をまとめる責任者、日比谷図書館の館長を兼ねた

東京の図書館の被害

東京市立図書館では20館のうち、独立した建物であった深川・京橋・一橋の３館、そして小学校附設の９館（麹町，外神田，日本橋，両国，月島，台南，浅草，本所，中和）が焼失しました。また、日比谷を含む３館が破損しました。

被災した館の蔵書のうち、貸出などのために館外にあって焼失を免れたものもありました。震災前の蔵書約23万冊のうち、残存図書数は約13万冊で、震災により東京市立図書館全体で約半数の蔵書が失われてしまいました。

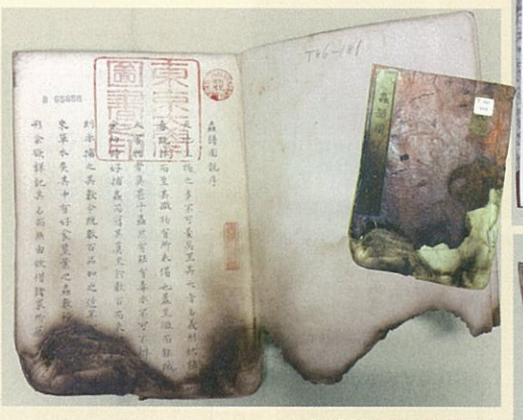
図書館名	被害	罹災前の蔵書	残留図書	残存率
日比谷	破損	82,051冊	80,289冊	97.9%
麹町	焼失	3,137冊	636冊	20.3%
一橋	**焼失**	**11,236冊**	**693冊**	**6.2%**
外神田	焼失	6,001冊	192冊	3.2%
日本橋	焼失	12,551冊	1,737冊	13.8%
両国	焼失	5,810冊	414冊	7.1%
京橋	焼失	11,052冊	1,014冊	9.2%
月島	焼失	6,405冊	168冊	2.6%
三田		6,436冊	6,419冊	99.7%
麻布	破損	7,314冊	7,300冊	99.8%
氷川	破損	7,855冊	7,797冊	98.9%
四谷		6,386冊	6,352冊	99.5%
牛込		4,370冊	4,306冊	98.5%
小石川		6,720冊	6,718冊	100.0%
本郷		6,326冊	6,313冊	99.8%
台南	焼失	5,915冊	261冊	4.4%
浅草	焼失	7,848冊	732冊	9.3%
本所	焼失	5,831冊	171冊	2.9%
中和	焼失	5,230冊	287冊	5.5%
深川	焼失	17,073冊	597冊	3.5%
総計		225,547冊	132,396冊	58.7%

出典：『東京市教育復興誌』p.65（東京市役所，1930.3）

◆東京帝国大学の図書館も全焼

本郷の東京帝国大学附属図書館も、関東大震災で大きな被害を受けた。震災直後に薬学部棟の薬品から出火した火災がまたたく間に図書館に移り、書架やテーブルなどの木製家具と76万冊の蔵書が３日間燃え続け、豪華な建物と家具・和漢洋の貴重な書物が灰燼と化した。かろうじて救われた資料に残された焼跡が、図書館を襲った悲劇を物語る。

国内の篤志家・図書館人に加え、海外の図書館や財団・日本人研究者などからも、寄付や貴重書の寄贈をはじめ様々な支援が届けられ、昭和３年に新図書館が再建。このときつくられた荘厳な建物は、現在も東京大学総合図書館として利用されている。



【左】『蟲譜図説』（写本）
【右上】『暦象考成』、【右下】『咬嚼吧歴和解』
東京大学総合図書館所蔵

【左】壁だけを残して焼け落ちた東大図書館、
【右】昭和3年に完成した新図書館
東京大学総合図書館所蔵

◆震災からの復興 —初期—

9月末にはバラックで臨時図書館を開設

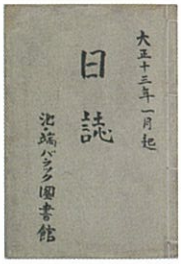
関東大震災では、小学校附設を含む12館の東京市立図書館が蔵書もろとも焼失しました。一方、中央館である日比谷図書館では、日比谷公園にて避難生活を送っている人々への食糧提供などの支援が9月11日まで行われていたので、市立図書館復興への準備は翌12日からスタートしました。厄災を逃れた館では再開に向けて一斉に館内整理を開始。主任会議にて下記3つの応急策が検討され、実施されることになりました。

- ■被災者が多く集まるところに臨時閲覧所を設けて、娯楽用図書・実用書・児童書・新聞・雑誌などを提供する
- ■焼失した図書館の後に仮図書館を建設する
- ■多くの書籍が失われたこの機に、図書分類を改正する

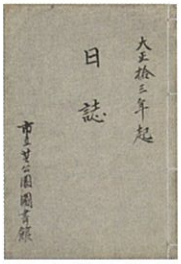
震災後、早朝に入館者の列ができた日比谷図書館
『市立図書館と其事業』18号,
東京市立日比谷図書館発行,1924.3,千代田図書館所蔵

まず、大きく被災していない8館の運営が再開されました。最も早かったのは日比谷図書館で9月22日に再開,残り7館も10月中旬までに再開しました。次に、臨時閲覧所がバラック建て(ありあわせの材料を用いて作った粗末な建物)で作られ、急ぎ買い集めた長編講談などの読み物や新聞・雑誌、日比谷図書館の蔵書を融通して、閲覧を開始しました。9月27日開設の青山に続き、日比谷・九段・芝離宮など計6ヶ所に臨時閲覧所が設けられました。

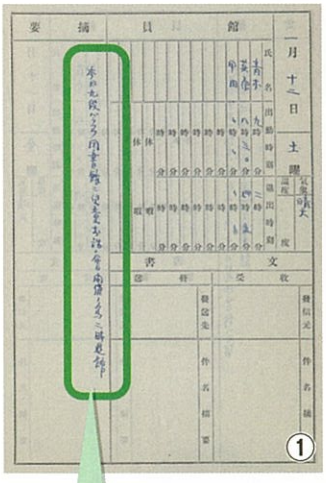
業務日誌からは、池ノ端(上野)と芝公園の臨時閲覧所(バラック図書館)には2-3名の職員が配属されており、日比谷や他の図書館と職員が行き来して業務していたこと、また、児童向けのお話会を開催していた臨時閲覧所があることなどが読み取れます。

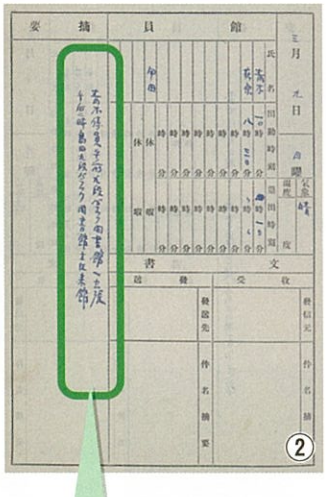


①②『日誌 大正13年1月起』(002)
池ノ端バラック図書館作成,
千代田図書館所蔵
「一橋・駿河台図書館業務資料」

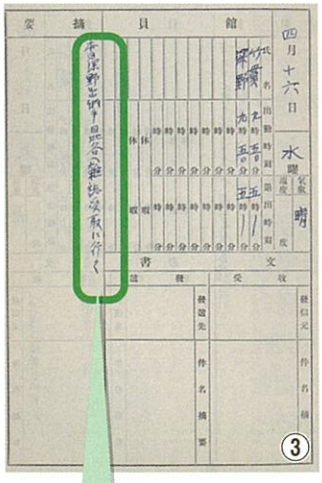


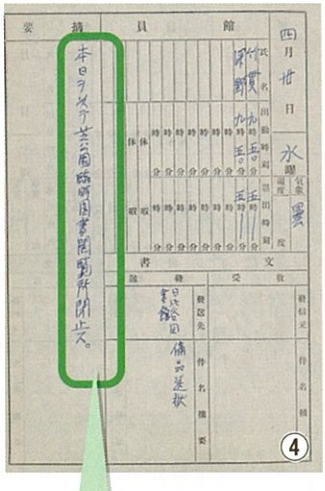
③④『日誌 大正13年起』(003)
市立芝公園図書館作成,
千代田図書館所蔵
「一橋・駿河台図書館業務資料」





大正13年1月12日(土)
本日九段バラック図書館に児童お話の会開催の為、2時退館。
3月9日(日)
青木係員、午前九段バラック図書館へ出張。
午後2時、島田九段バラック図書館主任来館。





大正13年4月16日(水)
本日深野出納手、日比谷へ雑誌受取に行く。
4月30日(水)
本日を以て、芝公園臨時図書閲覧所閉止。

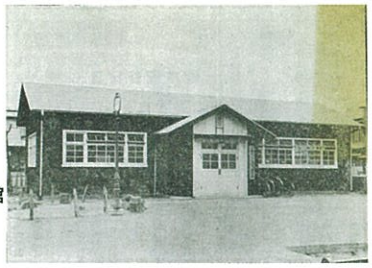
深川・京橋・一橋もバラックの仮図書館で運営を再開

震災で焼失してしまった3つの独立館(深川・京橋・一橋)は、新図書館が完成するまでの間をしのぐため、バラックの仮図書館の建設に取り掛かります。深川図書館は、仮図書館に先駆けて、テントで運営を再開しました。3館は、大正13(1924)年1月下旬から着工し、6月1日から(震災から9ヶ月後)バラック館舎が開館したことが、広報誌『市立図書館と其事業』に記されています。

しかし、当時の一橋図書館の業務日誌を見ると、5月25日から閲覧が再開されたと記載されています。6月1日の開館に先立つ、試運転的なプレオープンと考えられます。これは今回、業務日誌を調査して初めて知ることができた新事実です。

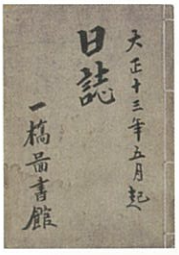
一橋図書館のバラック館舎は、駿河台のニコライ堂敷地内に54坪(約180平米)で開館しました。開館当初は多数の児童が利用しましたが、徐々に大人の利用が増え、毎日500人を超す館内閲覧者の8割を占めるようになりました。

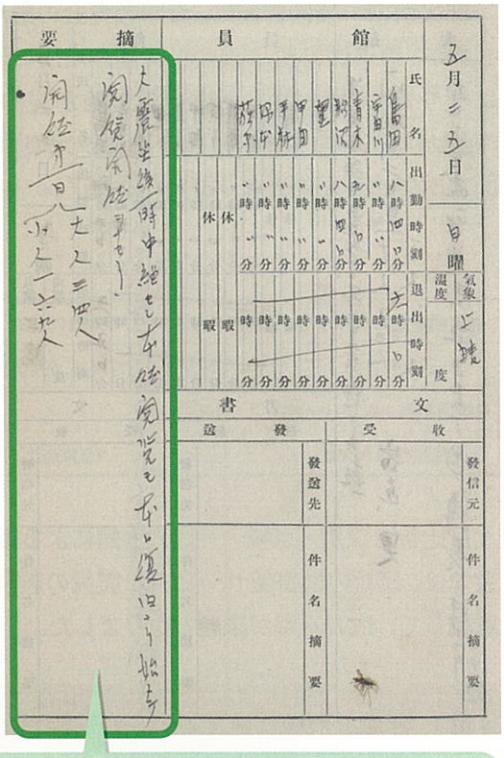
図書館テント
深川図書館所蔵



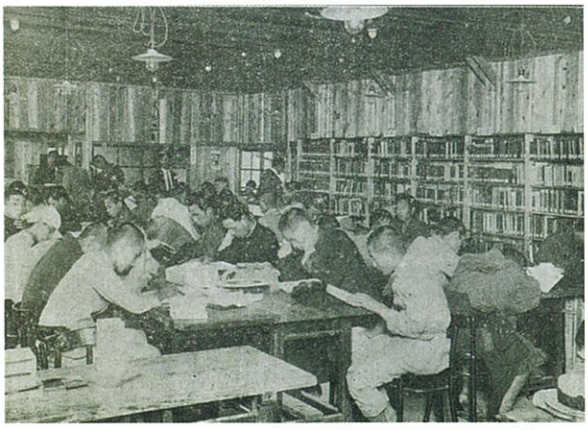
バラック建ての深川図書館
『市立図書館と其事業』21号,
東京市立日比谷図書館発行,
1924.8,千代田図書館所蔵

『日誌 大正13年5月起』(005)
一橋図書館作成,
千代田図書館所蔵
「一橋・駿河台図書館業務資料」

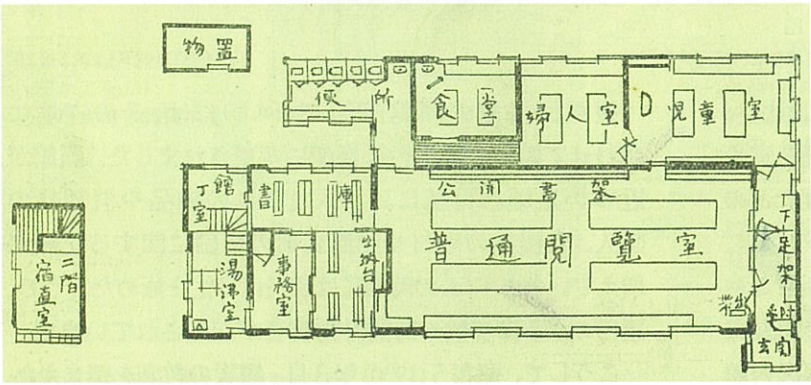




大正13年5月25日(月)
大震災後一時中断せし本館閲覧も本日復旧なり。始めて閲覧開館をなせり。
開館第一日、大人34人、小人169人。



バラック時代の
一橋図書館の閲覧室
『市立図書館と其事業』21号,
東京市立日比谷図書館発行,
1924.8,千代田図書館所蔵



バラック時代の一橋図書館平面図
『東京市立図書館と其事業』55号,東京市立日比谷図書館発行,1930.2,千代田図書館所蔵

■東京市図書館の復興状況(大正13年3月中旬)

日比谷図書館(中央図書館)
閲覧時間
4/1~9/30
8時~21時
10/1~3/31
9時~21時
有料閲覧

種別	館名	復旧開始日	閲覧時間・閲覧料
大きな被害がなかった図書館(小学校附設)	三田	T12.10.2	平日 15時半~21時 日曜祭日 10時~17時 無料閲覧
	麻布	T12.10.2	
	氷川	T12.10.15	
	四谷	T12.10.2	
	牛込	T12.10.11	
	小石川	T12.10.2	
	本郷	T12.10.5	
焼失したため仮校舎で開館中の図書館(小学校附設)	麹町	T12.11.1	
	外神田	T12.11.1	
	日本橋	T12.11.28	
	月島	T12.11.26	
	台南	T12.12.21	
	中和	T12.11.7	
臨時図書閲覧所	日比谷	T12.9.22	10時~16時 無料閲覧
	九段	T12.10.9	
	芝公園	T12.12.1	
	芝離宮	T12.10.15	
	青山	T12.9.27	
	上野	T12.10.23	
バラックで仮館舎を建設中の図書館	一橋		
	両国		
	京橋		
	浅草		
	本所		
	深川		

出典:『市立図書館とその事業』
18号(東京市立日比谷図書館,1924.3)をもとに作成

◆震災からの復興 ―新図書館の建設準備へ―

深川・京橋・一橋の新図書館の建設計画

大正13(1924)年3月の東京市議会において、東京市立深川・京橋・一橋の3図書館に総額100万円で復興計画が決まりました。

	大正13年時の予定		実際の建設準備進行	
費目	実施予定年度	当初予算	実施年度	組換予算
一橋図書館 敷地買収費	**大正13(1924)年**	**68,000円**	**大正15(1926)年**	**125,915円**
深川図書館 建設費	大正15(1926)年	276,150円	昭和2(1927)年	256,416円
一橋図書館 建設費	**大正16(1927)年**	**347,150円**	**昭和3(1928)年**	**326,475円**
京橋図書館 建設費	大正17(1928)年	308,700円	昭和2(1927)年	291,194円
	合計	1,000,000円	合計	1,000,000円

出典:「図書館復旧建設費ニ関スル件」(東京都公文書館所蔵)と「市立図書館と其事業」をもとに作成

被災前の一橋図書館は、帝国教育会の敷地内にありましたが、復興図書館(新図書館)は別の場所に建設することになりました。しかし、適当な土地が見つからず用地準備が難航したため、一橋の後に予定されていた京橋図書館の建設が先となりました。大正14(1925)年の末になってようやく、ニコライ堂に近い神田区駿河台北甲賀町5番地(現在の千代田区駿河台3丁目11番地)に496坪(約1,639平米)の新用地を確保して、昭和3(1928)年から工事が始まりました。この間、一橋図書館はニコライ堂の仮館舎で運営を続けていました。

被災図書館の復興建築	昭和2(1927)	昭和3(1928)	昭和4(1929)	昭和5(1930)
深川図書館	4月起工	6月竣工、9月開館		
京橋図書館 ※区庁舎との合築	11月起工		9月竣工、11月開館	
一橋図書館(駿河台)		**12月起工**	**12月竣工**	**3月開館**

日比谷と深川・京橋・一橋の3館による復興図書館建設のための協議会では、最新の図書館サービスと震災の教訓(耐震・耐火・迅速な避難など)を意識して、次の4点が議題となりました。

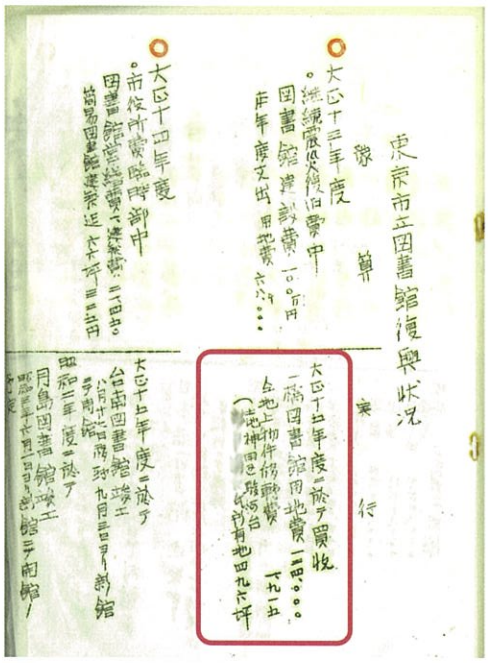
第1、書庫を別棟に建てるという前近代的な考えをやめて書庫部を閲覧室に近接させること

第2、出納式をやめて公開書架式にすること

第3、下足制を廃止して、土足のまま入館できるようにすること

第4、書庫は積層式にし、書架は鋼鉄書架にすること

『秋岡梧郎著作集:図書館理念と実践の軌跡』(日本図書館協会,1988)より


東京市立図書館復興状況

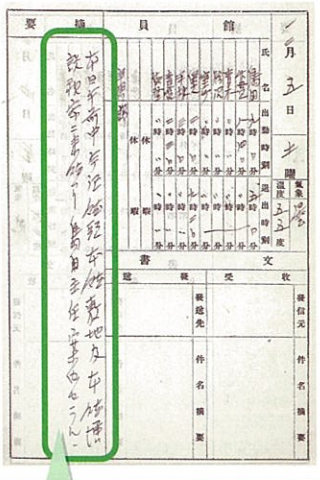
一橋図書館の用地買収費が記載された資料
「東京市立図書館復興状況」
『公文書類綴 自大正13年3月』(114-090)
千代田図書館所蔵
「一橋・駿河台図書館業務資料」

業務日誌にみる一橋図書館の復興準備

震災後の業務日誌には、一橋図書館員が視察や日比谷・深川・京橋などとの職員会議を重ねて、復興準備を進める様子が記録されています。敷地を検討し、大学などの図書館を参考に建築や家具を検討し、購入する図書、設計図の確認と進行していくのが読み取れます。ここにたびたび登場する「島田主任」は、一橋図書館で館長に相当する役割を担い、被災時の救出活動から復興図書館の建築まで、一橋図書館のために奔走した人物です。

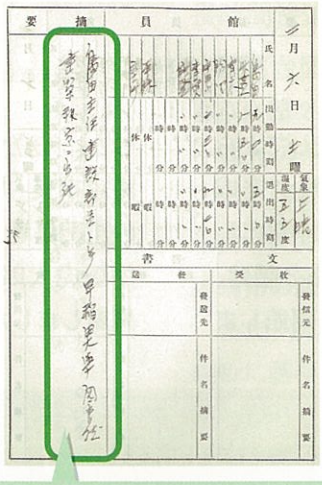
復興図書館の開館前年(昭和4年)には、その立地に合わせて館名が駿河台図書館に変更されました。開館が近づいた頃の日誌には、小型家具の納品や消耗品の購入、新聞社の取材や開館式典の準備に関する記録が増えていきます。この時期には職員は多忙を極めたようで、連日のように多数の時間外勤務者が記録されています。

こうして、昭和5(1930)年3月、震災の教訓を踏まえた駿河台図書館が開館しました。



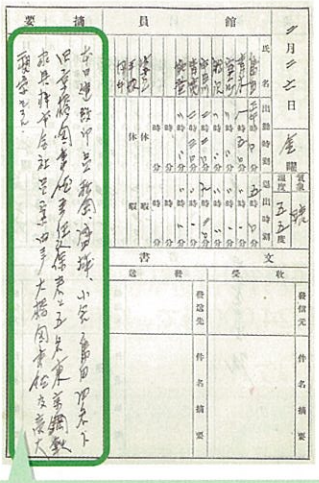
①

大正14年12月5日(土)
本日午前中今澤館頭本館敷地及本館増設視察に来館あり。
島田主任案内せらる。



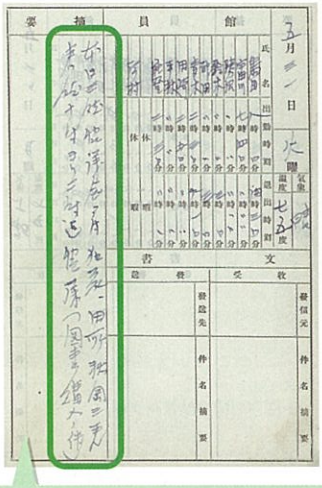
②

大正15年2月6日(土)
島田主任、建設部員として
早稲田大学図書館建築視察に出張。



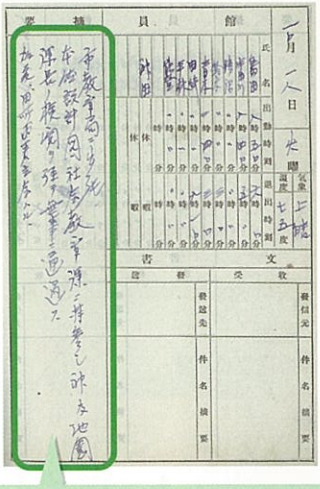
③

大正15年2月26日(金)
本日建設部員　秋岡、盛城、小谷、島田、4名と旧京橋図書館主任久保君と5名、東京鋼鉄家具機械会社員案内にて大橋図書館及帝大視察せらる。



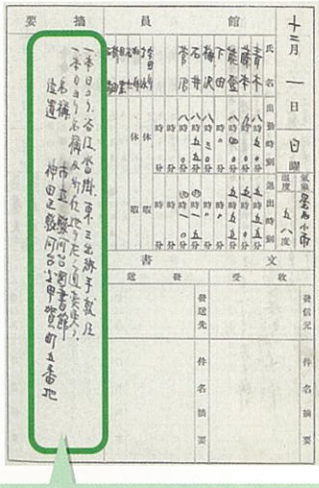
④

昭和2年5月31日(火)
本日三館協議会に付加藤、田所、秋岡3君来館10時より2時迄協議(図書購入の件)。



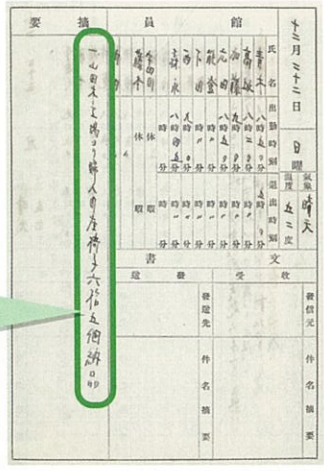
⑤

昭和2年10月18日(火)
市教育局に出張、本館設計図社会教育課に持参し神及池園課長の検閲を経て無事に通過す。
加藤、田所両君立会はる。



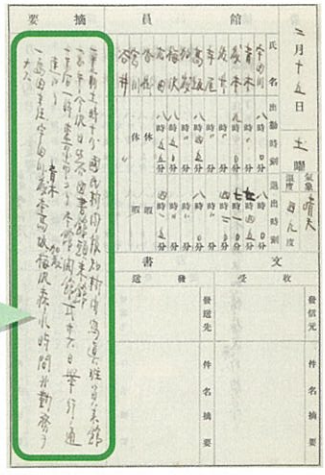
⑥

昭和4年12月1日(日)
一、本日より、谷江、沓掛、東、3出納手就任
一、本日より名称及所在地を左の通変更す
名称　市立駿河台図書館
位置　神田区駿河台北甲賀町5番地



⑦

昭和4年12月22日(土)
山田木工所より
婦人用座椅子65個納品。



⑧

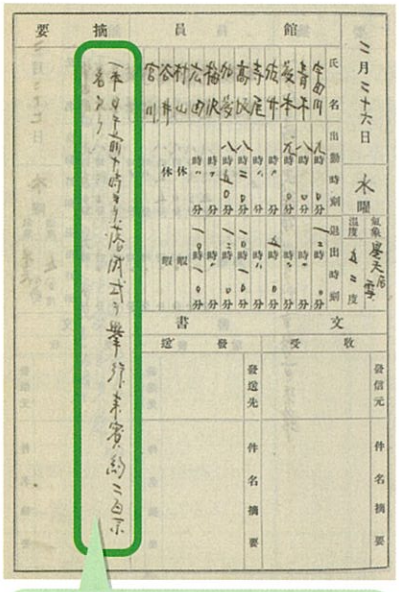
昭和5年2月15日(土)
一、午前11時10分国民新聞・報知新聞、写真班員来館
一、正午、今澤日比谷図書館館頭来館
一、午後1時東京市より本館開館式26日挙行の通達あり
一、島田主任、宇田川、青木、藤本、高坂、加藤、梅沢、森永、時間外勤務をなす

※加藤は日比谷、田所は深川、秋岡は京橋の主任
①『日誌 大正14年1月起』(006)　②③『日誌 大正15年1月起』(007)　④⑤『日誌 昭和2年1月起』(008)　⑥⑦『日誌 昭和4年1月起』(010)　⑧『日誌 昭和5年1月起』(011)
①～⑦一橋図書館作成　⑧駿河台図書館作成　千代田図書館所蔵　「一橋・駿河台図書館業務資料」

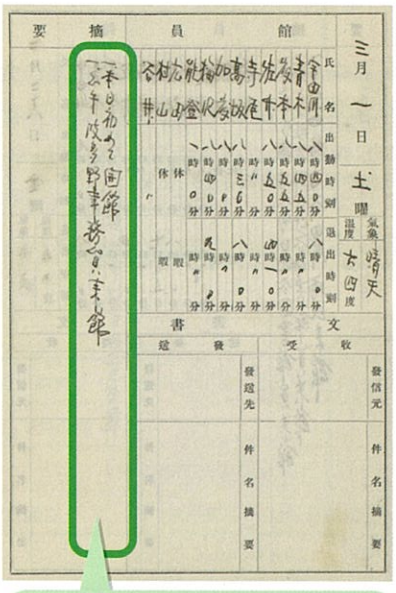
◆完成した駿河台図書館

昭和５年、震災からの復興図書館が完成

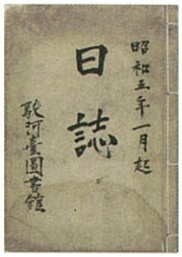
東京市立一橋図書館が関東大震災により焼失してから７年、ようやく駿河台の地に震災復興図書館が完成しました。立地に合わせて名称を変更した駿河台図書館は、敷地面積461坪（約1,524平米）、鉄筋コンクリート３階建、蔵書約24,000冊で、昭和５（1930）年３月１日に開館しました。先立つ２月26日に執り行った開館式（落成式）には東京市長・堀切善次郎、日比谷図書館館頭・今澤慈海などの市関係者をはじめ、文部大臣・田中隆三、東京府知事・牛塚虎太郎、神田区長・白鳥徳之助など多数の来賓が列席しました。



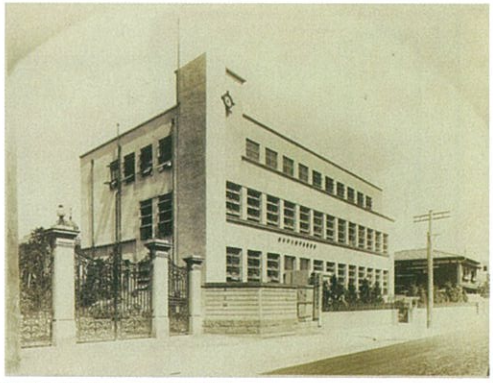
昭和5年2月26日
一、本日午前10時より落成式を挙行。
来賓約200余名あり



昭和5年3月1日
一、本日初めて開館
一、正午、波多野事務員来館



『日誌 昭和5年1月起』（011）
駿河台図書館作成
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」



駿河台図書館全景（130-001）
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

中略

祝辞（東京市神田区長白鳥徳之助）　『［東京市駿河台図書館復興建築工事竣工式典］式辞』（128-005）
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

◆図書館員点描②　波多野賢一（はたの・けんいち、1896-1943）

明治29（1896）年福岡生まれ。八幡製鉄所図書館、台湾総督府図書館を経て、大正10（1921）年、日本初の図書館員養成機関である文部省図書館員教習所に第１期生として入所。翌年修了後に、日比谷図書館に勤務。

関東大震災後は、焼失した蔵書を補うため基本図書の収集に尽力した。昭和６（1931）年、復興開館した駿河台図書館の初代館長となり、昭和17（1942）年までその職にあった。

波多野が本領を発揮したのは、江戸資料の収集・整理、各種の書誌作成であった。また、参考業務（レファレンスサービス）を重視、利用者への助言のために、図書館員は文献を渉猟し、テーマ別目録を作成することを提言。昭和９（1934）年には、それまでの研究を集大成し、弥吉光長（やよし みつなが）と『参考文献総覧』（朝日書房）を刊行した。

『図書館を育てた人々 日本編1』
日本図書館協会発行,1983.6

駿河台図書館外観
(129-004)
千代田図書館所蔵
「一橋・駿河台図書館業務資料」

長時間快適に過ごせるように、最新設備を導入

駿河台図書館では、利用者が長時間快適に利用できるように種々の新たな設備が導入されました。たとえば通風や採光のために、窓の位置や形状には特に注意が払われました。照明は全面的に電気照明となり、停電時に備えて米国ウェスチングハウス製の自動発電装置を設置。暖房は、東京市の施設としては初めて温水暖房が使用されました。

また、前庭に植栽を施したり、2階のバルコニー(屋上庭園)に藤棚を設けるなど、緑化にも注意が払われていたことがわかります。バルコニーは3階にも造られ、当時はニコライ堂越しに秋葉原方面を眺めることができたようです。

館書圖臺河駿立市を擧げる式落成す

學生街の中心に

工費四十万圓の復興圖書館

設備は空前の現代式

大正十三年百餘万圓の復興豫算案を通過した東京市立圖書館は昨秋京橋、深川圖書館を皮切りに鐵筋新築の帝都に輝しい復興を見せてゐるが遂に交通出來上り神田區北甲賀町に新築された市立駿河臺圖書館が廿六日午前十時落成式を擧行(三月一日開館)するに至つたのは市民の智識復興の上に何よりも嬉しい事である。

この新設の圖書館を一巡するに者は一日その素晴らしい規模と活潑な設備と、九貫した内容とには驚嘆を禁じ得なかつた。先づ工費三萬建坪七二〇坪。この最も斬新な試みの一つは衣具室で、こゝには閲覧者の外ペその他の閲覧者品を保管する爲めに、三百廿箱の鐵製衣具箱があり閲覧者は受付で交付された合鍵で安全に携帯品を自ら保管することが出來る。又た三階のバルコニーには大お自慢の藤棚があり花壇があり四囲の絶佳な風景と共に讀書子の疲れた頭を休めるに充分である。閲覧室は昨秋既に竣工した一つ麹町圖書館の一万冊に新たに一万餘冊を加へて合計二万餘。付近は職生街である關係上、職生向きの受驗參考書が實に驚くべき で特に受驗、青年、全國高等專門學校の各種の受驗案内を始め專門學校の學用概算までも詳細の調査を表示してゐる。島田館長等多年の苦心も報いられる時が來た

素晴らしい駿河臺圖書館

駿河台図書館の開館に関する新聞記事
【左】読売新聞昭和5年2月25日(126-128)、
【右】報知新聞昭和5年2月15日夕刊(126-125) 『一般図書館切抜帳』
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

【左】駿河台図書館正門 (129-002)
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」
【右】空から見た駿河台図書館
『東京市立駿河台図書館要覧』(昭和8年)
日本図書館協会所蔵

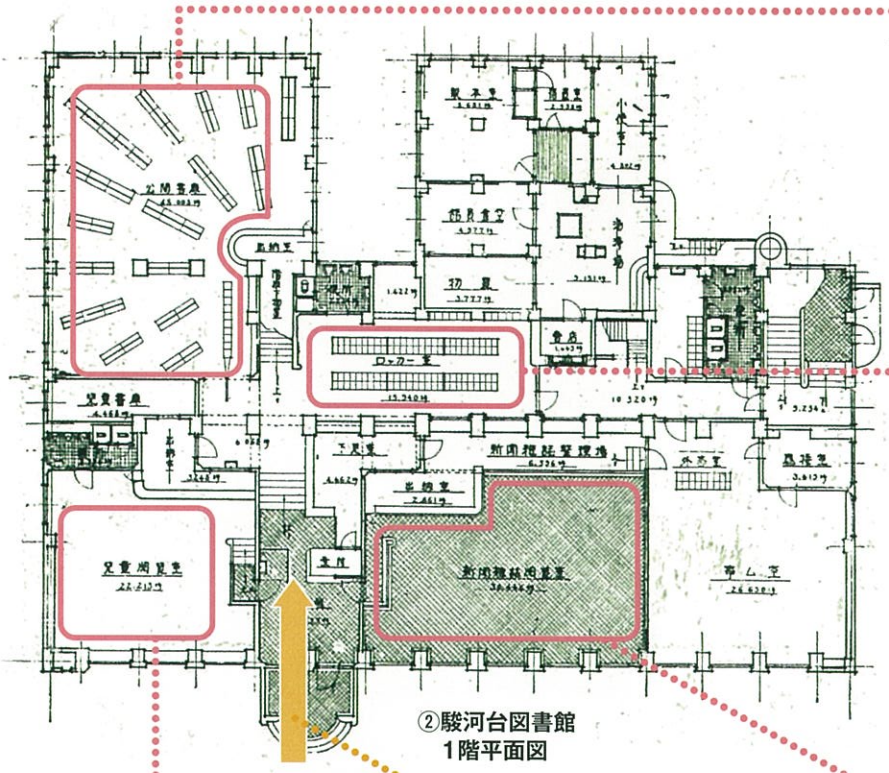
鍵付きロッカーが完備された1階

1階は257坪(約850平米)で、児童閲覧室(60席)、新聞雑誌閲覧室(75席)、公開書庫(安全開架室)、ロッカー室(360人分)、閲覧券交付所(入館受付)、事務室などがあります。

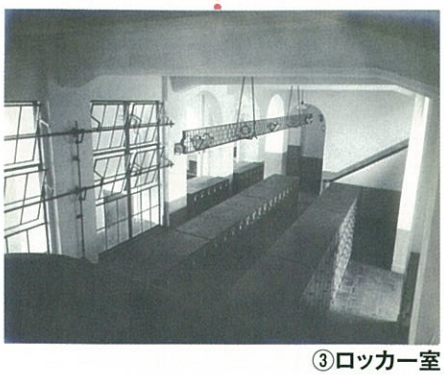
一橋図書館の時代から日比谷図書館に匹敵する利用状況であり、また交通の便が良く周囲には多数の学校があることから、駿河台図書館は多くの利用者が見込まれていました。そこで東京市立図書館中の他館では類のない、独特の閲覧システムが考案されました。

利用者は、まず1階の受付で閲覧票とともにロッカーの鍵を受け取ります。鍵の番号は閲覧室の席の番号と共通で、利用者は指定されたロッカーに携帯品を入れて、2階の目録室や閲覧室へ向かいます。退館の際には、鍵と閲覧票を受付に返却します。このような利用方法によって、閲覧室での席取りや携帯品の紛失などのトラブルを防止しようとしました。このシステム導入のためロッカー室が作られ、設置されたロッカーの製作は、日本の鋼製家具製造の草分けである大東工業(1928年に東京鋼鉄家具製作所から改称)が担いました。

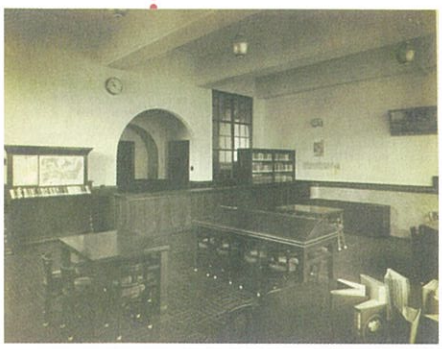
①公開書庫



②駿河台図書館
1階平面図



③ロッカー室



④児童閲覧室

⑤入口から見た館内

⑥新聞雑誌閲覧室

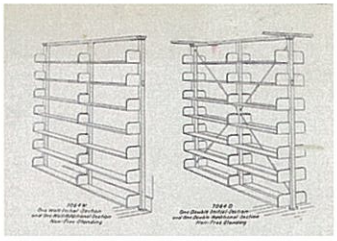
①「世界的権威ライブラリ・ビウロウ製鋼鉄製書架」「一般図書館切抜帳」(126-135)　②「東京市立駿河台図書館案内 昭和7年」(136)
③(129-007) ④(129-008) ⑤(129-010) ⑥(129-009)
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

鋼製の書架が設置された書庫と閲覧室が隣接する2階

2階は225坪(約744平米)で、一般閲覧室(328席)、目録室、書庫への出入口と出納室などがあります。深川・京橋図書館同様に書庫と閲覧室を一体的に建築し、スピーディな出納を可能にしました。ゆったりとした4人掛けのテーブルが設置された閲覧室は、一隅が女性用席となっています。

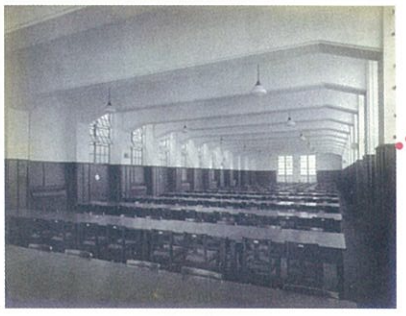
書庫部は先に建てられた深川・京橋と同様に積層式にして、書架は震災の教訓を踏まえ、耐火・耐震性にすぐれた鋼製書架を全面的に採用しました。駿河台の場合、1階公開書庫の書架も含めて、米国ライブラリービューロー製の鋼製書架が使用されました。

③書庫

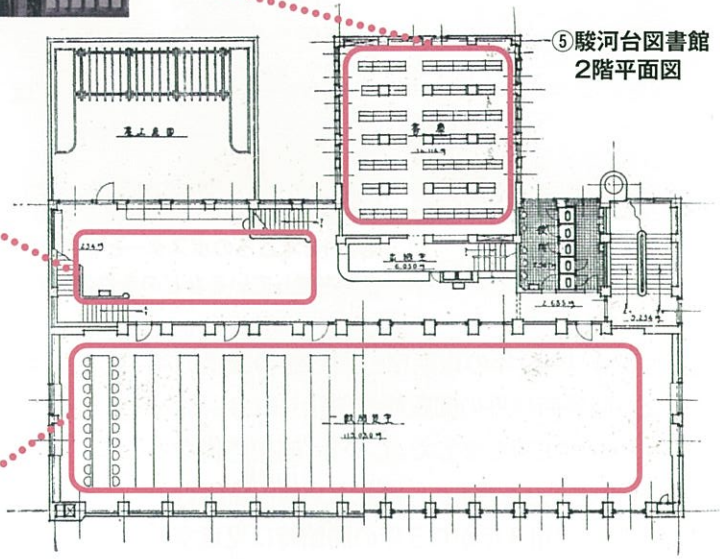


④鋼鉄製書架のカタログ

①目録室



②一般閲覧室

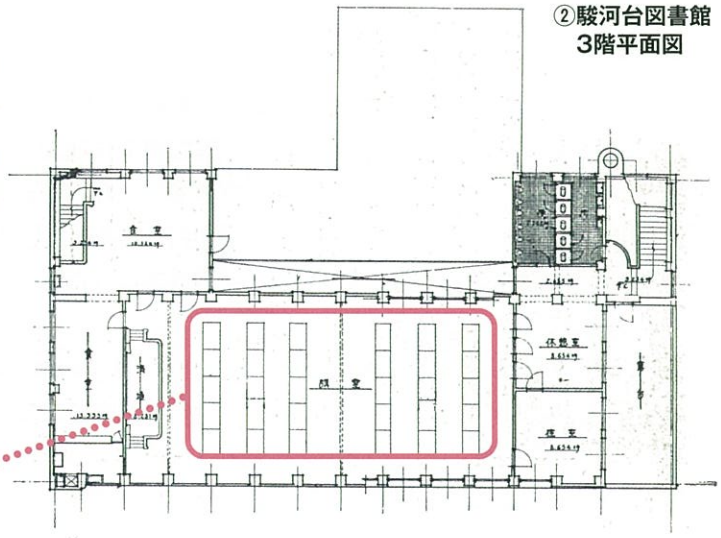


⑤駿河台図書館
2階平面図

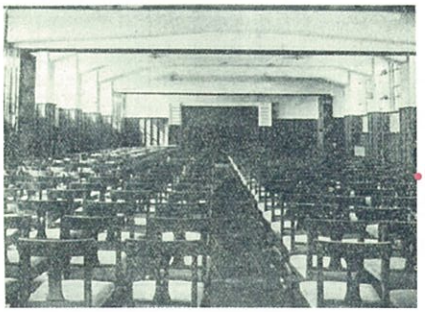
①(129-006) ②(129-005)
③④「世界的権威ライブラリ・ビウロウ製鋼鉄製書架」『一般図書館切抜帳』(126-135)
⑤『東京市立駿河台図書館案内 昭和7年』(136)
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

講堂や食堂などを備えた3階

3階は145坪(約479平米)で、400人を収容できる講堂(平常は第二閲覧室として使用)、食堂、休憩室、バルコニーなどがあります。食堂は、「愉快に明るく且よりよく消化」できるよう、他の図書館のように地階などの薄暗い場所ではなく、3階に設けられました。



②駿河台図書館
3階平面図



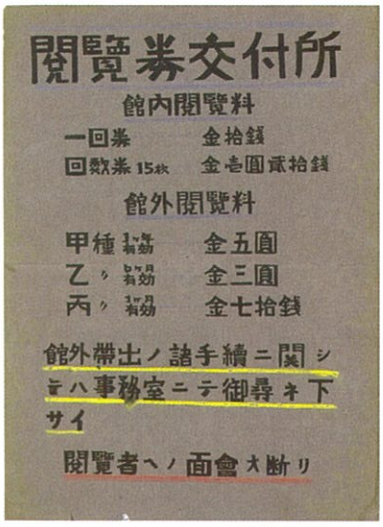
①講堂

①『東京市立図書館と其事業』55号,東京市立日比谷図書館発行,1930.2,千代田図書館所蔵
②『東京市立駿河台図書館案内 昭和7年』(136),千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

◆駿河台図書館の利用方法

東京市立図書館と閲覧料

明治期には、書物は大変高価で貴重なものだったため、公共図書館では書籍の閲覧は有料が一般的でした。しかし、東京市では、多くの人に図書館を利用してもらうため、最初の市立図書館である日比谷(明治41年開館)の設立準備段階から無料閲覧を目指していました。日比谷や深川のような独立した建物をもつ図書館では実現できませんでしたが、市立小学校に附設した簡易図書館は無料閲覧となりました。



閲覧券交付所ポスター(131-001)
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

閲覧券交付所
館内閲覧料

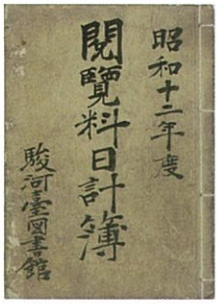
一回券	金10錢
回数券(15枚)	金1円20錢

館外閲覧料

甲種1ヵ年有効	金5円
乙種6ヵ月有効	金3円
丙種3ヵ月有効	金70錢

館外帯出の諸手続に関しては事務室にて御尋ね下さい

閲覧者への面会お断り



『閲覧料日計簿 昭和12年度』(098)
駿河台図書館作成,
千代田図書館所蔵
「一橋・駿河台図書館業務資料」

《参考》
昭和12年ごろの物価 ※100錢=1円
- カレーライス:15~20錢
- 映画館入場料:55錢
- 日雇い労働者の賃金(1日分):1円43錢

昭和12年ごろのポスターと考えられる。館外閲覧料は館外貸出の料金。市内電話を持っている、在勤在学しているなどの条件のいずれかに該当すれば、有効期間中は貸出を受けることができた。

その後、大正4(1915)年の東京市立図書館の機構改革を機に、日比谷図書館以外の閲覧料無料化(日比谷も児童室と新聞雑誌室は無料)が実現しました。しかし、昭和恐慌などによる市の財政ひっ迫を理由に、深川・京橋・駿河台の復興図書館3館は昭和3年から5年の開館時に児童室と新聞雑誌室を除いて有料閲覧に戻りました。現在のようにすべての公立図書館の入館・閲覧が無料となったのは、図書館法が施行された昭和26(1951)年からです。

駿河台図書館は、住所や年齢に関係なく、閲覧料を払えば誰でも利用できました。閲覧料と呼んでいますが、閲覧冊数に関わらず金額は一定で、入館料に相当するものです。当時は、図書館の利用とは「館内で図書を閲覧すること」が中心でしたから、「図書館の入館」と「図書の閲覧」は、ほぼ同じ意味でした。図書の館外貸出が図書館で一般的になるのは戦後になってからです。

開架と閉架

現代の公共図書館では、蔵書は開架エリア(開架室)と閉架書庫の2か所にわかれて配架されます。開架エリアでは、書架に並んだ本を利用者が見て、手に取って選ぶことができます。一方、閉架書庫には利用者が入ることができないため、利用者は読みたい本をコンピューターで検索して選びます。図書館員は選ばれたその本を書庫から出してきます(書庫出納)。

戦前、多くの図書館では開架エリアが存在せず(児童室と新聞雑誌室を除く)、図書は閉架書庫から出納されたものを閲覧席で読むのが基本的な利用方法でした。利用者に出納待ち時間が生じる点、本を見て選ぶことができない点、図書館員の業務量が増える点などのデメリットがありますが、多くの図書を収納できる点や、蔵書紛失のリスクが少ない点などが、閉架出納方式のメリットでした。

閲覧席と書架が隣接する千代田図書館の開架エリア
(区民の書斎ゾーン)

集密書架で収容量を高めた千代田図書館の閉架書庫

閉架書庫の普通図書（大人向けの書籍）を閲覧する場合

戦前の図書館では、蔵書の大半が閉架書庫に収納されていました。この閉架図書を館内で閲覧するのが、最も基本的な図書館の利用でした。

■閲覧する場合の手順

①建物入口にある受付（閲覧券交付所）で**閲覧券**を購入する。**閲覧票**とロッカーの鍵を受け取る。

②1 階のロッカー室でロッカーに上着や荷物を入れる。

③2 階の目録室でカード目録を検索して、読みたい本を見つけ、**閲覧票**に請求記号（本の背ラベルに記載されている数字や記号）や書名などを記入する。

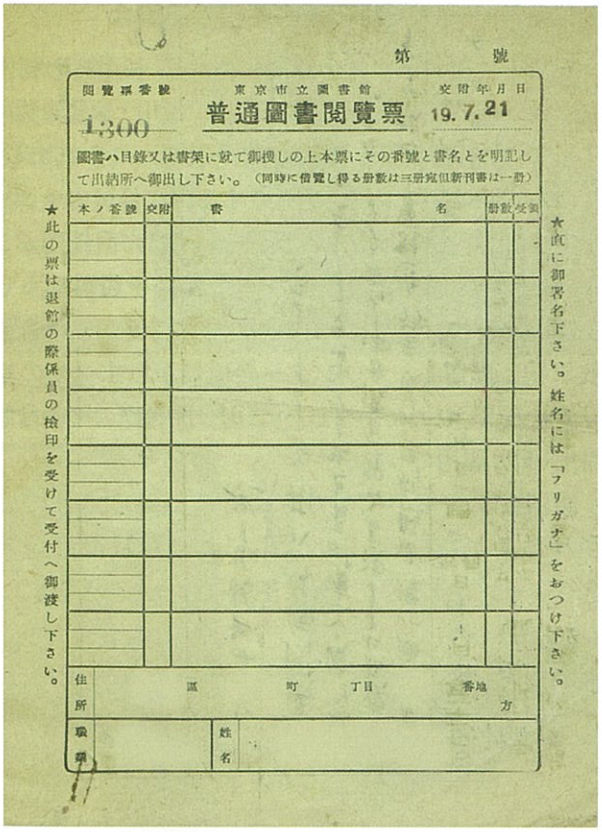
④2 階の書庫の手前にある出納台の係員に**閲覧票**を渡し、しばらく待つ。

⑤氏名が呼ばれたら、出納台で本を受け取る。

⑥2 階の閲覧室にあるロッカー番号と同じ番号の席で、受け取った本を読む。

⑦読み終わったら本を出納台へ返却し、**閲覧票**に係員の受領印を捺してもらう。

⑧受付にて**閲覧票**とロッカーの鍵を返却して、退館する。**閲覧票**に読んだ本の受領印がないと退館できない。



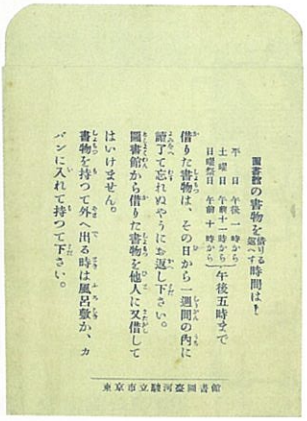
東京市立図書館の普通図書閲覧票　日本図書館協会所蔵

駿河台図書館の回数閲覧券　個人蔵

児童室と新聞雑誌室を利用する場合

児童閲覧室と新聞雑誌閲覧室は閲覧料が不要のため、受付を通らずに入室できます。児童閲覧室は公開式（開架式）で、館外貸出も行っていました。

新聞雑誌閲覧室では、雑誌300種・市内新聞15種・地方新聞45種などを閲覧することができました。



【左】東京市立図書館の児童図書閲覧票　【右】駿河台図書館のブックポケット
日本図書館協会所蔵

駿河台図書館1階の新聞雑誌閲覧室
『東京市立駿河台図書館案内 昭和7年』（136），
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

公開書庫（安全開架室）の図書を借りる場合

東京市は復興図書館の建設にあたり、利用者の利便性向上のため開架書架の導入を検討し、深川・京橋・駿河台３館で、大規模な安全開架方式が取り入れられました。この方式では、開架室に出入りする際に係員のチェックを受ければ、棚に並んでいる本を利用者が直接選ぶことができます。「安全」というのは、「蔵書を盗難から守ることができる」という意味で、駿河台図書館では書架を放射状に配置し、カウンターの係員からすべての棚を見渡せるようにしていました。この公開書庫の図書は館外帯出（貸出）専用でした。

駿河台図書館の公開書庫は昭和８(1933)年まで運用されたようですが、このようにしても蔵書の紛失が７パーセントに及んだため、閉架になったそうです。

駿河台図書館１階の公開書庫内
『東京市立駿河台図書館案内 昭和7年』(136)，
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

駿河台図書館１階の公開書庫の入口
(129-011)，
千代田図書館所蔵
「一橋・駿河台図書館業務資料」

■借りる場合の手順

①建物入口にある受付（閲覧券交付所）で、保証書※を提出して帯出者の資格を作る。
※市内電話を持っている、在勤在学しているなどの条件のいずれかに該当することを示す書類

②受付で**閲覧券**を購入し、**帯出閲覧票**を受け取る。

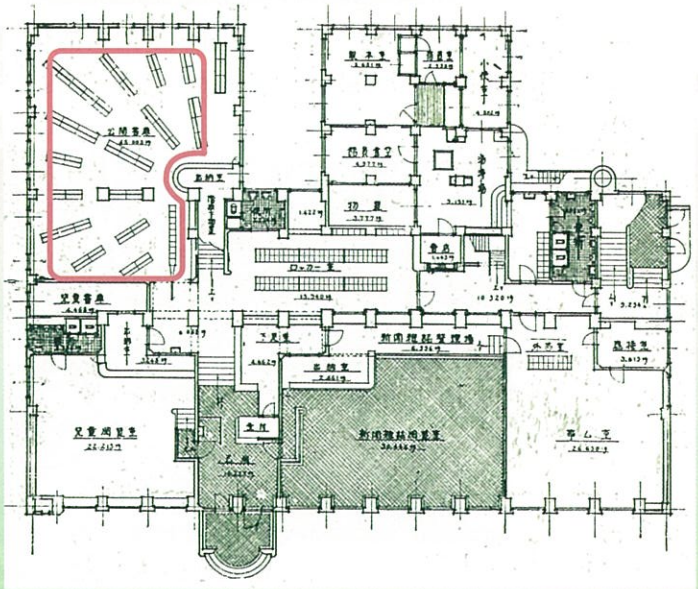
③公開書庫に入室し、館外帯出者専用ロッカーに荷物を入れる。

④書架に並んだ本を見たり、カード目録を検索したりして、借りたい本を選ぶ。

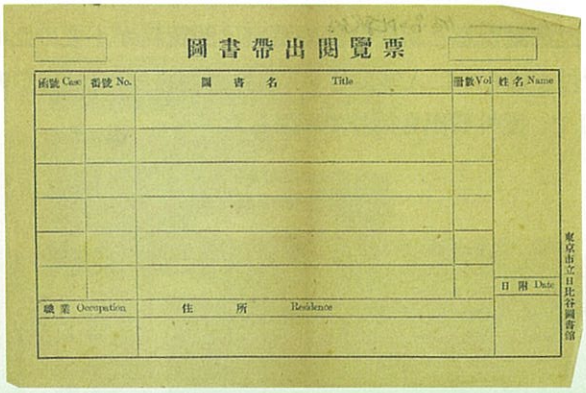
⑤借りたい本を持って公開書庫内の館外帯出取扱所（カウンター）へ行き、**帯出閲覧票**に書名などを記入し、係員に提示する。

⑥**帯出券**を購入または提示し、公開書庫から退室する。

⑦受付にて**帯出閲覧票**を返却して、退館する。



駿河台図書館 １階平面図
『東京市立駿河台図書館案内 昭和7年』(136)
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」



圖書帶出閲覽票

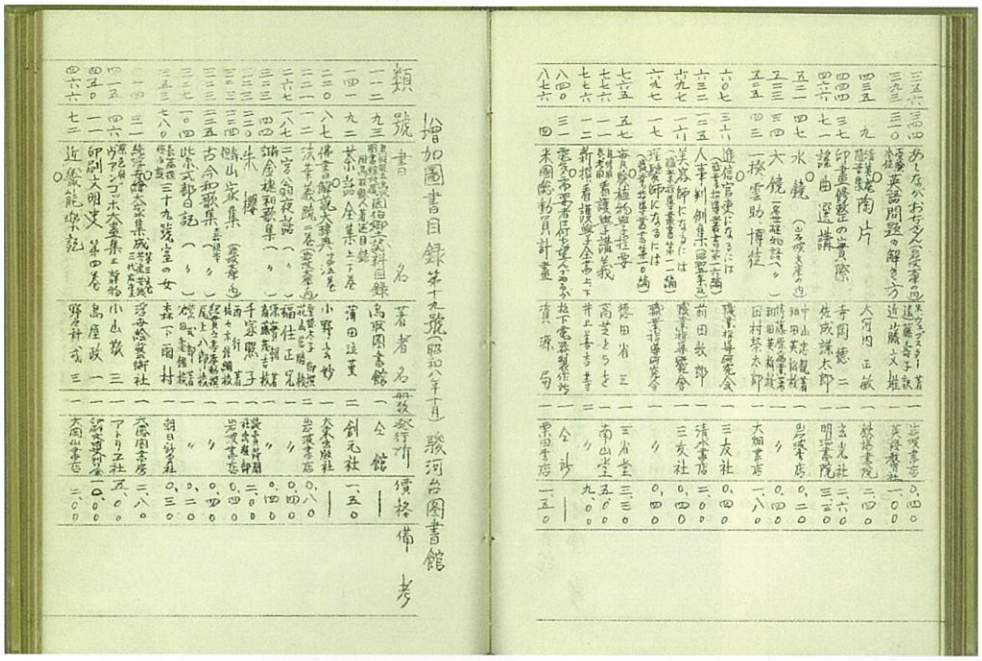
函號 Case | 號號 No. | 圖書名 Title | 冊數 Vol | 姓名 Name
日附 Date
職業 Occupation | 住所 Residence
東京市立日比谷圖書館

≪参考≫
日比谷図書館の図書帯出閲覧票
日本図書館協会所蔵

カード目録で本を検索

最近では、公共図書館の蔵書をコンピューターで検索できるようになりましたが、以前は冊子体の目録やカード目録を使って、読みたい本を検索していました。駿河台図書館では、蔵書の大半を占める閉架書庫の蔵書を検索するための目録室が設けられました。開館当時は、書名順・分類順などのカード目録を収めた細長いカードケースが台の上にずらりと並んでいました。

駿河台図書館3階の目録室(129-006)
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

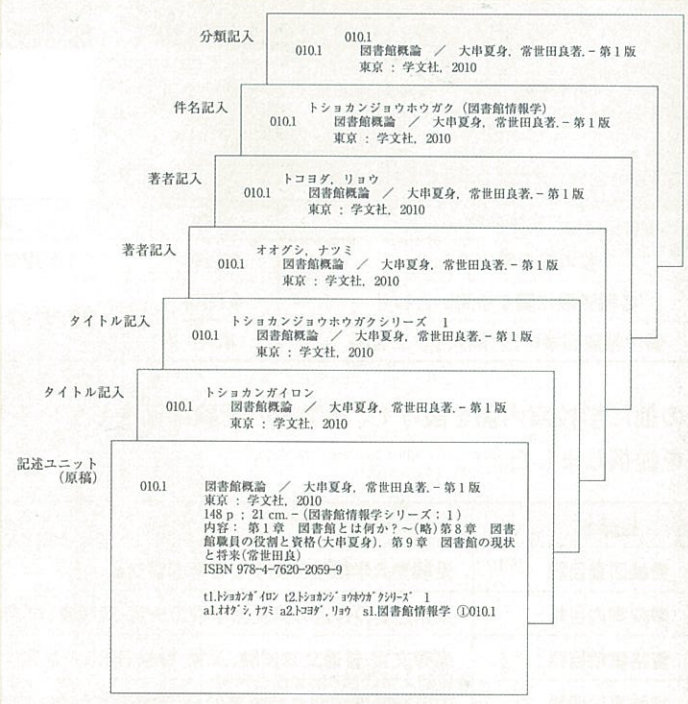


冊子体目録
『駿河台図書館増加図書目録　第一編』
駿河台図書館発行,1934.3,千代田図書館所蔵

ある公共図書館の戦前のカード目録(件名)
個人蔵

◆カード目録とは

書名・著者名・出版社名・件名(キーワード)など、本の情報(書誌情報)をカードに記載したものを**目録カード**と呼ぶ。**目録カード**を書名の音順に並べて箱に入れると、書名から本を検索することができる「書名目録」になる。同様に、カードを分類順に並べると、調べたいテーマの本を検索することができる「分類目録」になる。利用者が様々な切り口から検索できるように、図書館は「書名目録」「分類目録」「件名目録」「著者名目録」など、複数のカード目録を整備していた。途中に書き込む余地の少ない冊子体の目録と異なり、カード目録では本が増えたら新しいカードを追加すればよいので、蔵書管理に向いていた。



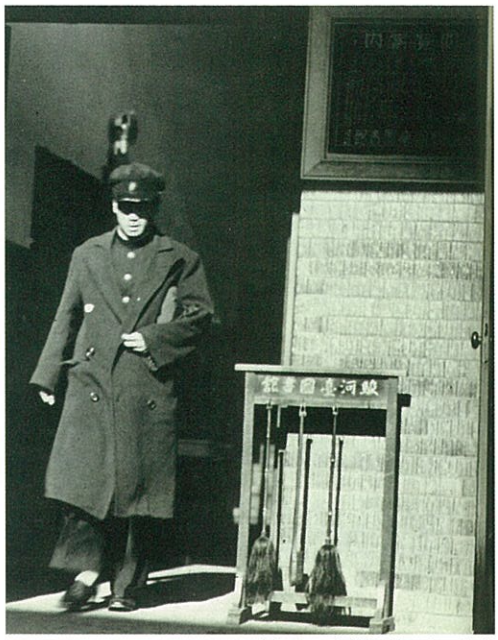
目録カードのサンプル
『情報資源組織法―資料組織法・改』第一法規発行,2012.3,千代田図書館所蔵

◆駿河台図書館を利用した様々な人々

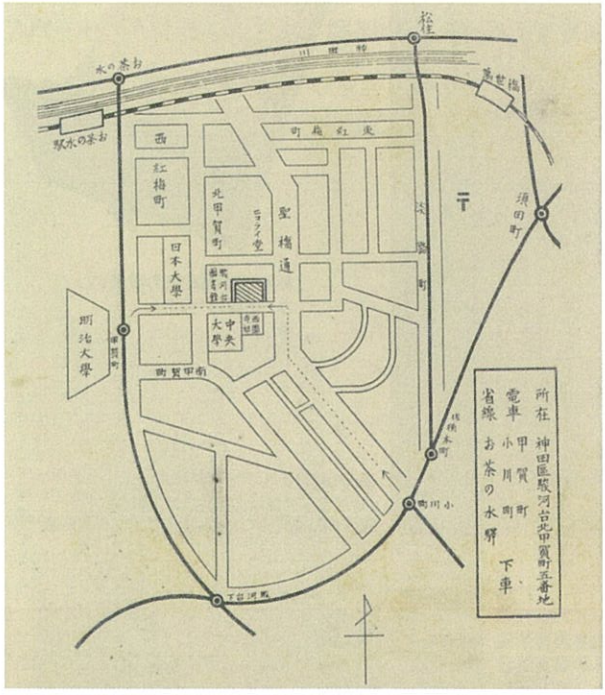
利用が多い学生向けのサービス

駿河台図書館の周囲には、日本大学・中央大学をはじめ多くの学校があり、利用者の9割は学生でした。そこで、学生と研究者のための図書館を目指すことになりました。

駿河台図書館では、「参考事務」というサービス名で、「どんなことでも調査研究に必要な参考図書の問い合わせに悦んで応答しているので、調査の必要があれば問い合わせてほしい」と、利用を呼びかけました。これは、現代のレファレンスサービス（調査・研究のための相談・資料案内）にあたります。寄せられた相談内容からも、地域の実態に即した特色ある図書館運営が実施されていたことがわかります。



駿河台図書館を利用する学生
『千代田図書館八十年史』千代田区発行,1968.3,千代田図書館所蔵



駿河台図書館周辺地図
「東京市立駿河台図書館落成式次第」『一般図書館切抜帳』(126-170)
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

駿河台図書館2階の閲覧室
『東京市立駿河台図書館案内 昭和7年』(136)
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

■昭和7（1932）年9月以降の半年における相談件数

相談内容	件数	期間
参考書の問い合わせ	121件	1932年9月～12月
各種受験に関する問い合わせ	416件	1932年9月～1933年3月
備付希望図書申出（購入リクエスト）	43件	

出典:『東京市立駿河台図書館要覧』(昭和8年)
日本図書館協会所蔵

この他に学校案内係を設けて、諸学校の受験準備をしている学生のために、各種の受験に関する参考目録を用意し、情報を提供しました。

目録名	内容
受験図書目録	受験や入学試験に関する参考図書など
学校案内目録	東京とその付近の男女諸学校の一覧・規則書、卒業者名簿、交友会誌など
資格試験目録	高等文官・普通文官試験、高検・専検（後の大学入学資格検定に類するもの）の要項など
特殊事項目録	国資補助学校や育英事業の会（学費貸与団体）の所在地など

出典:『東京市立図書館と其事業』55号,東京市立日比谷図書館発行,1930.2

児童の利用

一橋図書館は児童の利用が多く、とくに貸出は他館を大きく上回っていました。同館では、児童講演会などの催し物などを実施して、図書館に親しんでもらおうと工夫しました。また、震災前に一橋コドモ会を組織して、活発な活動を展開していました。大正13(1924)年10月、仮建築の図書館で開催された震災後第1回児童講話会には259名が参加しました。

駿河台図書館が開館した後は、児童閲覧室にて、講演会・講話会・お話会・紙芝居などが頻繁に開かれ、昭和7(1932)年12月に3階の講堂で開催されたクリスマスの集会には約600名が参加するなど、多くの子どもたちが訪れていました。

駿河台図書館の児童閲覧室(129-012)
千代田図書館所蔵「一橋・駿河台図書館業務資料」

駿河台図書館の児童閲覧室
『東京市立駿河台図書館案内 昭和10年』日本図書館協会所蔵

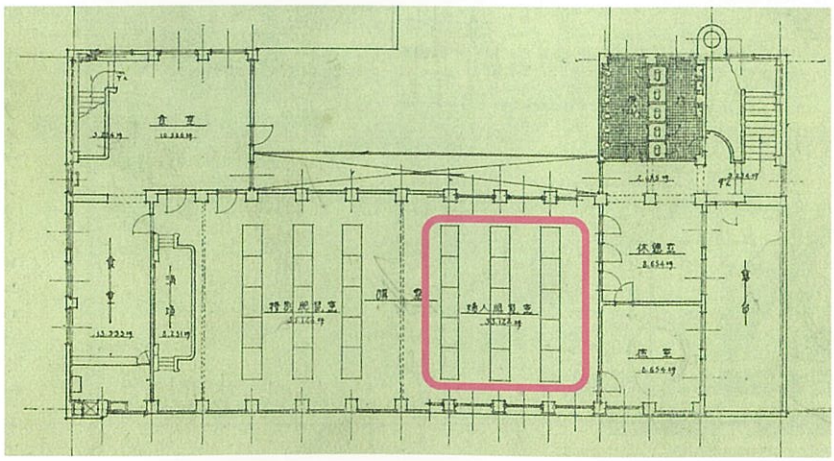
女性の利用

戦前は、本を読む女性はまだ少なく、読書する女性は肩身の狭い思いをすることも多かったようです。女性の読書への理解不足や男女別学を背景に、男女の閲覧室がわかれているのが一般的でした。

一橋図書館(大正期)や震災復興で建てられた深川・京橋・駿河台の3館にも婦人閲覧室(席)が設置されていました。駿河台図書館では、開館当初は2階の閲覧席の一部が婦人用席となっていましたが、その後、3階講堂を使用していないときはその半分が区切られて専用の婦人閲覧室として使用されるようになりました。

戦後、男女同権がうたわれ、女性向けの閲覧室は徐々に姿を消していきました。

京橋図書館の婦人室
提供:中央区立京橋図書館



駿河台図書館3階の婦人閲覧室
『東京市立図書館と其事業』55号,
東京市立日比谷図書館発行,
1930.2,千代田図書館所蔵

◆千代田図書館130年のあゆみ

明治20(1887)年	3.21　神田区一ツ橋に、**大日本教育会附属書籍館が開館**	有料
	その後、運営母体の名称変更に伴い改称	
	→ 1896.12.20　帝国教育会附属書籍館	有料
	→ 1907.6 帝国教育会附属私立教育図書館	有料
明治44(1911)年	11.5　帝国教育会附属私立教育図書館の建物・蔵書の委託をうけて、東京市立神田簡易図書館が開館	無料
	→ 1912.4.1　東京市立神田第一簡易図書館と改称	無料
大正2(1913)年	4.1　**東京市立一橋図書館と改称**	無料
大正12(1923)年	9.1　**関東大震災により、一橋図書館は全焼**	無料
大正13(1924)年	6.1　神田区駿河台東紅梅町(ニコライ堂下)にバラックで開館	無料
昭和3(1928)年	12.7　神田区駿河台北甲賀町に復興図書館起工	
昭和4(1929)年	12.1　立地に合わせ、東京市立駿河台図書館と改称	
	12.29 東京市立駿河台図書館竣工	
昭和5(1930)年	3.1　**東京市立駿河台図書館が開館**	有料
昭和20(1945)年	7.13　戦争のために閉館(図書館員は京橋図書館に勤務)	
	8.15　終戦	
	10.10ごろ 再開	有料
昭和25(1950)年	4.30　図書館法公布	
	10.28 千代田区立駿河台図書館となる	有料
昭和26(1951)年	4.1　図書館法施行、すべての公立図書館は入館・閲覧が無料となる	無料
昭和30(1955)年	12.1　九段下に新館完成、**千代田区立千代田図書館として開館**	無料
平成19(2007)年	5.7　区役所移転に伴い、九段第3合同庁舎9，10階に移転	無料

千代田区提供

有料：閲覧料あり　無料：閲覧料なし

国土地理院　標準地図(2500)を使用